禁断の恋　トライアングル

黎奈姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
禁断の恋　トライアングル

【Ｎコード】
Ｎ１２０４Ｍ

【作者名】
黎奈姫

【あらすじ】
主人公ユウナは三つの国の一つ、光の国の王女である。
ユウナは、三つの国の一つ、神の国の王子ロイが好きで、ロイも、ユウナが好き。
二人は、互いの気持ちを伝え合い、互いを想う気持ちは、増すばかりであった。
そんな中、三つの国の一つの魔の国の王子ゼロと結婚することになって！？

前置き

呪文を唱えることにより、この世に魔法を具現化させることができる空間に包まれている三国の王国。
三国の一つ目は、魔の国と呼ばれ、恐れられている国。
三国の二つ目は、光の国と呼ばれ、名誉と格式を誇る国。
三国の三つ目は、神の国と呼ばれ、神を信じ争いごとを、好まない国。
魔の国と光の国は敵対関係にあり、神の国は中立の立場だった。
そして、あろうことか光の国の王女と神の国の王子は、互いに想いを伝え合う恋人同士の関係にあった。
神の国は、争いを好まぬため、どの国とも、同盟を結ばない。
光の国は魔の国に、おされていた。
このままでは負けてしまうと思っていた、光の国の王は、降参しようか否か迷っていた。
が、両国の戦火の苛烈が極まると、魔の国の王から王族同士で婚姻を結び、和平条約を結ぼうと要求してきた。
光の国の王は、不本意だったが、他に成すすべもなく、要求を受け入れた。
こうして、王女は、敵国である魔の国に嫁がされてしまったのである。
そんな王女の物語である。

前置き（後書き）

これから、メインを書くので、これからもよろしくおねがいします。

第一章　嫁がされたユウナ

ユウナは、光の国の国王（父）に、魔の国に嫁げといわれたとき、反対した。
「好きでもない相手と結婚することはできない。」
と。だが、父は、
「このままでは、わが国は、負けてしまう。」
の、一点張りで私の言葉など、耳にかさなかった。
私は、父を説得することを諦めた。
そして、私は魔の国に連れて行かれた。連れて行かれた先は、大きく、装飾のされている城だった。
私は、私の、夫となる相手と対面した。相手の名は、ゼロ。会って初めていわれた言葉は、
「お前の髪、珍しい色をしてるんだな。」
という言葉だった。
・・・無理もない・・・私、白髪だもの。・・でも、・・むかつく・・・
「黒髪も珍しいと思いますが。」
と、私は、言い返した。
ゼロの髪は、黒髪だった。それ故に、言い返したのだ。
「まあ、そうかもな。」
と、あっさり言われた。
それもそうだ。この国の王族は黒髪で、それ以外の色の奴は、平民と、決まっている。
私の国の場合、魔力の高い者、または、特殊な能力の持ち主が王族になり、その家系が、代々、王位を継いでいく。
対面した後、私は部屋へ案内された。
中は、意外にもシンプルだった。ベットとテーブルが、一つずつあるだけだった。

～その日の夜、夕食～

王族達が一緒に食べる夕食会。私の隣には、ゼロが、座る。
私の方へと、次々に視線が集まる。並びだされた数々の料理。
その一つに、手を伸ばそうとした時、ふいに視界が歪んだ。
たまらず、その場から体が崩れる・・はずだった。
誰かが私を支えてくれたのだった。
うっすら、目を開けた。
目の前には、なんとゼロがいた。ゼロが、体を支えてくれたのだった。
ゼロの唇が動いた。でも、何て、言っているのかわからない。
だけど、かすかに、遠くから、舌打ちが聞こえた。
それを、最後に私は、気を失った。

第二章　ユウナへ、抱く想い

ユウナが、目を覚ましたときはすでに朝で、案内された自分の部屋に、寝かされていた。
私は、起き上がったけど、ふいにめまいがして、頭を抱えた。
そのとき、ガチャッと音がした。
「・・目が覚めたか・・おい、大丈夫か？」
と、部屋に入り、声をかけたのは、ゼロだった。
ゼロの手には、料理をのせたお盆があった。ゼロは、私のために運んできてくれたのだろうか。
ゼロは、テーブルの上に料理をおき、私に近づいてきた。ゼロは、
「料理食べれるか？」
と、心配しているような声で、聞いてきた。私は頷き、立ち上がろうとした。が、突然視界が歪んだ。
ゼロが、
「おいッ！」
と、さけび、体を支えてくれた。
「無理するなって。まだ寝ていたほうが・・・」
とゼロが言い終わる前に、私は、呪文を唱えだした。
ゼロは言葉を途中で飲み込み、こいつ、いったい何をする気だ？と、思い、ユウナのでかたを待った。
ユウナは、唱え終わった呪文を、解き放った。そして、
「毒。」
と一言、短く言った。ゼロは一瞬、何を言っているのか、分からなかった。
次の瞬間、ユウナは『毒』と自分で言った料理を、口にしようとした。
俺は、ユウナのやっていることが、わからなかった。
ユウナが口にしようとした瞬間、俺は、それを、叩き落とした。

なぜならば、本能が、
『食べさせるな！！』
と、強く主張したからだった。
ユウナが、
「何で？」
と、俺のした行為に平然と聞いてくるからつい、
「何でって・・お前、自分で毒物食べようと、自殺行為する奴を見てろって言いたいのか！！」
と、怒鳴っていってしまった。
ユウナは、わびれた風でもなく、
「あなただって、私の死を願っているんではないんですか？」
と、俺が、ユウナの死を願っていると疑わない、信じきった眼で聞いてきた。
死に急いでる風でもなかったが、何か、忽然とする物言いに引っかかった。　俺は、
「おれは、お前の死を・・ユウナの死など、願っていない！」
ときっぱり答えた。
ユウナは、
「本当？」
と、聞いてきたから、
「本当だ！」
と、剥きになっていってしまった。
ユウナは、
「そう・・。」
と、俺の言葉を信じていない様子で、答えた。
ユウナは、突然、
「昨日、私・・夕食会で倒れたんですよね・・」
と、いきなり、話題を変えるから、
「あ、ああ。」
と、驚き気味に答えた。　ユウナは、はぁーと、ため息をついて、

「また、倒れちゃったんだ・・・」
というので、
「また？」
と、聞き返した。
そのあと、答えが返ってくるかと、思いきや、ユウナは、
「う”ッ」
と、うめき、頭を抱えた。ユウナの表情が、さぁーと青くなる。
俺は、
「おいッ、大丈夫か？」
と、聞いたが、答えが、返ってこないので、ユウナを、ひょいっと、抱き上げた。
ユウナは、痛い、という表情を見せる。今ので、衝撃を、与えてしまったのだろうか。　俺は、
「無理するなよ、また来るからな。」
と、いいながら、ユウナを、ベットに寝かした。　ユウナは、
「・・ありがとう・・」
と、小さい声で言った。俺は、照れながら、
「たいしたことはしていない。・・ゆっくり、休めよ。」
と、いい、部屋から出た。
おれは、ユウナみたいな奴は、好きではない。
でも、言葉の物言いや、倒れた理由、ユウナのことがもっと知りたいと思う自分がいる。
　この気持ちは、何なんだ？
ゼロは、心にある、さまざまな感情に、惑わされていた。
とりあえず、料理に毒を盛った犯人を捜すとしよう
と、思った、ゼロであった。

第三章　毒を盛った犯人

ゼロが向かったのは、料理室だった。料理室のドアを開けた。
料理室には、王族の食事を作る長、料理長が、料理を作っている最中だった。
俺は、料理長に、
「料理長、忙しいところ悪いのだが、聞きたいことがある。」
と、声をかけた。　料理長は、作業の手を休め、
「殿下、なんでしょうか？」
と、聞いてきた。　俺は、
「俺がユウナの朝食を作ってくれと頼み、食事をここまで取りに来たまでの間、誰か来なかったか？」
と、たずねた。
・・毒を、長年仕えてきた料理長が盛るはずがない・だとしたら、俺がいない間に来た奴に可能性が、ある・・いったい誰が・・もし、そいつだったら、ユウナに顔向けができん・・
料理長が、
「え～と、来ましたよ。あなたの兄上の、ゼリム様の婚約者のユイ様が、・・。」
と、こたえた。
「！？」
俺は、声にならなかった。
「ありがとう。料理の邪魔をして悪かったな。」
と、一応、礼を、いい、その場から去った。
・・あいつが・・いや、まさかな・・だが・・あいつ・・ユウナが来てから機嫌が悪かったからな・・
俺は、戸惑った。ユイは、子供のころから知っている。俺は、信じられないでいた。
俺は、ユイに聞こうと思い、ユイの部屋を訪ねた。

部屋をノックする。そうすると、ユイが出てきた。ユイは、顔を輝かせて、
「ゼロ様、どうしたのですか？」
ときいてくる。俺は、早速、
「ユイがユウナの料理に毒を盛ったのか？」
ときいた。ユイは、顔色が、さぁーと変わり、引きつった笑みを浮かべ、
「さ、さあ、私には何のことだか、・・」
と、とぼけた。俺は、
「とぼけても無駄だ。料理長に聞いた。・・なぜそんなことをした？」
ユイは、はぁーとため息をつき、
「ごめんなさい。だって、あの子が来てから、ゼロ様は、私にかまってくれないから・・」
と、うつむいてしゃべりだす。俺は、
「かまってやれなかったのは、悪かった。だが、あいつはあれでも、俺の妻だ。だから、もう、こんなこと、するなよ。」
と、いった。ユイは、
「ごめんなさい。」
と、謝ってくれた。俺は、
「ならいい。じゃあ、またな。」
とユイと別れた。
これで、一つの謎は、解けた。
ゼロは、このあと、ユウナに料理とデザートを持っていこうと思った。ささやかなお詫びとして・・
だが、ゼロは、気づかなかった。ユイの恨みのこもったユウナへの復讐心に。

第四章　婚姻の儀を前に

ユウナは、空を見上げていたら、急に
「ユウナ、体はもう大丈夫なのか？」
と、ゼロが声をかけてきたので、私は、
「もう平気です。・・迷惑をかけました。・・」
と、いい、私が急に謝ったせいなのか、あせった様子で
「・・わ、悪いのは・・俺らのほうだ・・だ、だからそんなこというなよ・・」
と、そっぽをむいていい、二人の間に、しばらく沈黙が流れた。
そのとき、ゼロが急に、
「・・俺今から、管理地の視察に行くんだけど、・よかったら、途中町で買い物でもするか・？」
と、誘ってくれた。私は、正直迷った。で、結局
「・・いいですよ。・別に・・私、買いたいものがあるし・・」
と、誘いを受けた。
買いたいものがあるのは本当で、迷ったのはロイから伝書鳩で送られる手紙を待っていたからだった。
「少し、待っていてください」
と言い残し部屋に戻った。
部屋に戻り、まず、ぼうしをかぶり、それと、お金を持って部屋に出た。
出たとたん、
「わぁ！」
と、声に出してしまった。なぜなら、すぐ目の前にゼロがいたからだった。ゼロは
「・・早く行くぞ。」
と、いい、私に背を向け歩いてく。あわてて私が後ろからついてゆく。

城を出て、徒歩で城下町を歩く。
露店の行列が道を挟む。商人たちが客を呼び止めようとする声が行き交う。
私は、数々の露店の中で目的の店を見つける。私はゼロに、
「あの店で買いたいものがあるんです。行ってもいいですか？」
とお願いした。ゼロは
「いいぞ。その店は、どこだ？」
と、問う。私は、目的の店を指差す。そして、その店へと向かう。
その店の主人が
「いらっしゃい。・・お、珍しい髪色をしているね、お客さん。」
と、おどろく。
・・初対面の人はロイ以外みんな同じ反応をする・・
私は、苦笑いして、
「よく言われます。・・あの、これください。」
と、ほしいものを手にとっていう。主人は、
「このフードだね。これは、５００エトゥだよ。」
といわれたので、いわれた料金を支払った。
「ありがとう～またきてね～。」
と主人に言われたので微笑んで、後ろに私と店の主人のやり取りを聞いていたゼロに話かけようとした。
そのとき見たゼロの表情は、言葉では現せられない深刻な表情だった。
私は
「ゼロ？」
と声をかけた。ゼロは、我にかえったのか、
「あ、悪い。じゃ、じゃあ、行くか。」
とあせったように私に背を向け、歩き出した。その背中は私が話しかけることを拒否しているかのように見えた。私は、
「ええ。」

といい、それ以来話しかけることなく、ゼロについていった。
ゼロはユウナが苦笑いする前に見せた表情のことを考えていた。
ユウナは、自分が見せた表情に気づかなかった。それ故にゼロの見せた表情の意味を理解できなかった。
ゼロは、ユウナに話しかけられるまで、全く周りに気づかなかった。
それまで、
・・ユウナ・・自分の髪色のこと気にしているのか・・だからあんな顔をして・・初対面でいったときのあの言葉、気にしているのだろうか・・いやでも、こいつがそんなこと・・うーん、でも・・
と、心配、不安、後悔といった、感情と、葛藤していた。
ユウナは、ユウナで、
・・どうしたんだろう？・・考え事？ま、いいや。買い物終わったし・・
と、気楽に考えていた。
そんな二人で、これから、やっていけるでしょうか・・・？

第五章　婚姻の儀

ユウナが魔の国に連れて行かれて二週間たった。
国と国との争いで両国とも痛手を受けた。
光の国より勝っていた魔の国もそうとうな痛手を受けたらしい。
光の国は、魔力こそ魔の国に劣ってはいたが、特殊な能力の持ち主の数は勝っていただろう。
それ故に痛手を受けたのだ。
争い後の修復やら何やらで婚姻の儀が先延ばしになっていたらしいと、ユウナがあとから聞いた。
そして、婚姻の儀の当日、ユウナはため息を朝からついていた。
その理由は婚姻の儀でゼロとキスしなければならないのと、それをロイに見られてしまうことだった。
ロイの国は、争いごとを好まないため、光の国と魔の国が和平を結ぶことを喜ぶだろう。
その証として神の国の王子のロイが従者とともにこの国に来るらしい。貢物を持って・・・。
そのことは、ロイからの手紙で分かった。

私は、その日、憂鬱にながらも指定された時間に起きた。
部屋から出たら、朝食の時間だと言われ、ゼロに引っ張られて食事の場に連れて行かれた。
今日はなぜかゼロは機嫌がよかった。そのことを聞くと、
「・・別に・・」
と、とぼけていたが、体は正直でうずうずしていた。私はそれが不思議だった。
朝食が食べ終わると次は着替えに連れて行かれ、ドレスを着せられた。
ドレスは髪の色に合わせてか純白で、靴も白だった。いろいろ着飾

りさせられた。ゼロは私の姿を見て
「・・・。」
と無言だったが、顔を赤くして私と目を合わせようとはしなかった。
ゼロの格好はいかにも王子様というような感じでそれが意外にも似合っていて笑いそうになった。
普段とのギャップが激しすぎたからかなのか、それともロイとは違う印象を持った人だからなのか、
あるいは、その両方なのか、私には判断がつかなかった。
ただ、これだけははっきりしていたことがある。それはいつもとは違う雰囲気を漂わせていることだけだった。
　光の国では魔の国のことについてこんなことが噂されていた。
一つ、魔力を己の私利私欲のためだけに使われているのではないかと。
二つ、傲慢でプライドが高く、自己中な人たちの集まりだと。
三つ、己のためなら手段を選ばないこと。
この三つの噂は私が連れて行かれ、聞けなくなるまで消えなかった。
そして、後の二つは当たっているだろうと言われていた。
それは、光の国と魔の国が対立した理由の一つだったらしいからだった。
そんな噂を聞きながらこの国へ来た私だが、このごろ噂が外れていると思うときがある。
ゼロは、あまりしゃべらないし、自己中心的な人ではないと思い始めていたからだった。
ゼロは、
「早く行くぞ」
といって、早歩きで歩き始めていた。
「早い」
といっても、ペースを落とそうとしない。

前言撤回

どうやらゼロは自分の思考の限界度に達していると周囲が見えていないようである。
私は、歩くのをやめて、いまだに早歩きを続けるゼロの背中を見つめ続けた。
ゼロは、私がついて来ないのにようやく気づいたのか振り返る。
「早い」
と、私は同じ言葉を繰り返す。ゼロは、ようやく理解したのか
「悪かった。」
と、謝った。
　このあと、婚姻の儀を行う会場に着き、婚姻の儀を行った。
ゼロと婚姻の言葉を言い、唇を互いに合わせた。
・・・ロイ以外ではじめて唇を合わせた人・・・
互いに唇を離し、ゼロが、
「この婚姻の儀のもと、国と国、人と人の争いをしないと、共に誓おう。」
と、婚姻の儀を見ていた者に言った。
わぁーと歓声が沸き起こる。

　これにて婚姻の儀は終わりを告げた。

　私は、ゼロの顔をまともに見れないなと思った。

第六章　ロイとの再会

ユウナは婚姻の儀がひと段落してから、すぐにロイのいる部屋へと足を運んだ。
部屋をノックしようとしたら、
「ユウナ、待っていたよ。さあ、入って、話をしよう。」
と、ロイが私を部屋へ入るよう促した。
私はロイの部屋に入り、ロイに抱きついた。ロイも私の背中に手を回し抱きしめてくれた。
ロイが手を離すから私も離した。　ロイが、
「ユウナ、久しぶりだね。あれから会えなくてさびしかったよ。この国はどう？」
と、早速聞いてきた。私は、
「ええ、久しぶり。あれからね、・・・」
私はロイに会えなくなってから、ここまで大まかに話した。そして、
「私、この国は好きじゃないわ。だって、私の髪を珍しがって、笑うんだもの。」
あまり実例がないが、私が、歩くたびに周囲から、この白髪は蔑まれてきた。
「私の髪を唯一きれいだといってくれたのはロイだけよ。」
・・そう、ロイだけ・・今まで生きてきた中で私の髪をほめてくれたのは・・
「ロイの髪もきれいだわ。神のように神々しくて・・うっとりするわ。」
ロイの髪は金髪・・ブロンド・・まるで、世界を統べる王のよう・・
「ありがとう。ユウナにそういってもらえるとうれしいよ。」
といい、ロイは笑った。
ロイと話が盛り上がっていたころ、ドアのノックが聞こえた。ロイが、

「どうぞ。」
と、入ることを許した。　ガチャッと音をたてて入ってきたのはゼロだった。　ゼロは、
「ロイ殿、これからの滞在について話したいことが・・・って、なんでここにユウナが！？」
入ってきて突然しゃべり出したゼロだが、すぐに私の存在に気づいた。私は、
「話したいことがあったから・・・それよりゼロは何で？」
自分が来た理由を話しからそらしてゼロに来た理由を聞いた。　ゼロは、
「ロイ殿が、長期滞在することになって、その間、俺がこの国を案内する旨を伝えたかったからだが」
と不思議そうに、部屋に訪れた理由を淡々と述べる。
「そう。」
私がつぶやく。ゼロがいまだに私に何か言おうとしそうだからなのか、ロイが
「ゼロ殿、滞在は母からお聞きしていますが・・して、その案内とは・・？」
と、横から助け舟をだしてくれた。　ゼロが
「ロイ殿はこの国のことはまだご存知ではないでしょう。父が案内して差し上げろとの御命令で、早速、明日、この城の城下町・・マゼロンリーダという街の端から端までの御案内というのは、いかがかと。」
と、一気に説明した。ロイは、
「気遣い感謝いたしますと、伝えておいていただきたい。」
といった。ゼロは
「では・・」
と、ロイは笑って、
「ええ。喜んで、お受けします。」
と、案内を受けた。

私は、・・いいなぁ・・と思いながらゼロとロイの対話を聞いていた。　すると、
「ユウナもそのときご一緒してもよろしいでしょうか？友人がいればにぎわいますし、いいよね？」
とロイが聞いてきた。私の答えは、
「ぜひ、喜んで。ご一緒できるなんて光栄です。」
と、誘いを受けた。ゼロは驚いていたが、
「では、また明日に・・ユウナ、行くぞ。」
とわたしの腕を引っ張ってつれていこうとした。私は、少しためらって、
「えぇ、ロイ、また明日。」
と、ロイに聞こえるよう、ゼロに聞こえないよう言って部屋から出た。
部屋から出てなお、ゼロはまだ私を放さない。そのまま歩き出す。
　私は、
「ちょ、ちょっと放してよ。」
と言った。
・・私を何で連れてきたの・・？・・もっとロイと一緒にいたかったのに・・
ゼロは、
「ユウナ、あいつとどういう関係なんだ？」
と、私の腕を強くつかんで聞いてきた。
「え？」
いきなり聞いてくるから理解できなかった。　ゼロは、
「だから、あいつとどういう関係なんだ？」
と、同じ言葉を繰り返す。私は、
「ど、どうって聞かれても・・友人ですよ。前に知り合った・・」
ゼロがあまりにも真剣に聞いてきたから、驚いた。
「本当か？」
と聞いてくる。　私は頷いた。

嘘はついていない。ただ、一部分しか言っていないことも事実。
友人は友人だが、ただの友人ではない。と・く・べ・つ・な・友人なのだ。
ゼロは、
「そうか。」
と言って、私の腕を放した。ゼロは、
・・怪しい・・ユウナがあいつ（ロイ）に向ける表情は俺には向けられたことがない。引っかかる・・
とか思ってる。

これからどうなるでしょうか

第七章　街へ案内

街へ行く当日。

堂々と三人で歩くわけにはいかないのでフードをかぶっていくことになった。
城下町へ続く門から人々が行き交う。私たちもその中に混じり歩く。
私が真ん中で、両脇にロイとゼロ。歩きながらゼロが説明をしてくれた。
にぎやかな町並み、さわやかな天気。魔の国と聞いて思い浮かぶ風景とまるで違う。
私がロイと話に夢中になるといつもそれをさえぎるようにゼロがいろいろ説明してくる。
まるで、私とロイの邪魔をしているよう。
何で邪魔するの？と思う。でもゼロはロイが来てから言動がおかしい・・きっとそのせいだと、勝手に思い込んでる自分もいる。心の中がモヤモヤしていると、ゼロが
「昼食は、このあたりの評判のいい店でいいか？」
ときいてくる。ゼロは次第に敬語を使わなくなった。
ロイも肯定の意味を含ませて微笑む。
店の名は、ダーマン・タルト。この店はタルトがおいしいらしいとゼロが言う。
店に入ると中はシンプルな構造で一つ一つ席が区切られている。
一番見晴らしのいい席に座ると、店員が注文を聞きにやってくる。
店員は男性で、愛想笑いもなしに
「ご注文は・・？」
ときいてくる。
私たちはそれぞれほしいものを頼んだ。しばらく沈黙が続く。
が、それほど待たずに注文した料理が運ばれてくる。

私たちは、不思議に思いながらも料理を口にした。
「おいしい・・」
つぶやくほどおいしい料理ばかりだった。しかし料理の味を楽しむ間もなく、急激な眠気に襲われた。
それはロイもゼロも同じようだった。
眠気に耐えられず、テーブルに突っ伏して、気を失った。

・　・　・

意識を取り戻した場所は、ロイもゼロもいなかったが、代わりにさっきの店員がいた。
「あなたは！？・・っ！？」
叫び聞こうとしたが頭痛がして聞けなかった。
起き上がろうとしたが、手は縛られていて動けず頭痛がして体を支えれなかった。店員は、
「動くな。」
といった。私は、
「なんでこんなことを・・」
と、聞こうとしたが腕をつかまれ引き寄せられて続きをいえなかった。
「俺は・・お前が・・・」
そういいながら顔を近づけてきた。
・・な、何！？・・
もう駄目かと思ったそのとき、バン！と、ドアを蹴り飛ばした音がした。
店員は、
「！？」
驚いて振り向き私を放し扉のほうへ視線を向ける。そこは煙が舞っていて、人のシルエットが二人浮かんでいた。

・・誰？・・・
そう思ったとき、ひゅっと一つシルエットが消えた。
・・・え！？・・・
声に出す間もなく、私は抱き上げられ体が浮いた。視界がぼやけてはいたが、抱き上げてくれたのは、ロイだと分かった。隣にはゼロがいた。
二人とも私を見た後、店員を怒気のこもった目でにらみつけた。
ゼロはともかくロイまで怒りをむき出していることに驚いた。ゼロが
「あの料理に眠り薬をいれたんだな・・目的は何だ？」
と言い、店員はそれには答えずじりじりと後ろに退く。
ゼロが一歩前に出たとき、店員は、窓から飛び降りた。追おうとするゼロにロイが
「深追いは危険だ。それよりユウナを・・・。」
と、ゼロに叱咤し、私を下ろして手を縛っていた紐を解いてくれた。
ロイが私を支えてくれてようやくた立つことができた。が、しかし、激しい頭痛がして、頭を抱えた。
頭を抱える私を心配そうに声をかけてくれる。
大丈夫と言おうとしたとき、ふいに視界が歪んだ。私の体がガクッと崩れた。
「ユウナ！」
ロイが叫び支えてくれた。
その声を最後に私は気を失った。

このあと二人はユウナを城まで運びかえったことを記しておく。

第八章　ユウナの能力

ユウナは夢を見ていた。
ゼロが管理地の視察で馬車に乗って向かっていて、崖道を通る道を通っていた。
そこで何者かに馬車ごと崖に落とされる夢であった。
「・・ナ、・・ウナ、・・ユウナ！」
自分を呼ぶ声に反応し、目をうっすら開けた。視界に一番最初に入ってきたのは、ゼロだった。
「大丈夫か？熱はなかったが、ずいぶん、うなされていたぞ。」
と心配している声で言った。私は起き上がった。
「まだよせ、顔が真っ青だぞ。」
私を寝かせようとするゼロ。私は
「大丈夫。・・・これで倒れたの何回目だろうか・・・今回もまた・・・」
半ば独り言のようにつぶやく私。ゼロは、
「今回も、とはどういうことだ？以前も同じようなことを言っていたが・・」
と聞きたがる。それを予想した上で、
「その答えを言う前に説明しなければならないことがあって・・・」
という。
「説明？」
「はい。私に国では能力者の中でもっとも貴重な能力を持つ者が代々王位を継ぎでます。どうやって決めるかと言うと、能力者の能力の階級で決めるんです。」
「階級？」
「そうです。階級には、上から、Sランク、Aランク、Bランク、Cランク、Dランク、という順に五つ並んでいて、目安をいうと、Dランクは物を動かす程度で、cランクは遠くのものを操れる程度、

Bランクは、攻撃専用能力で強いものから弱いものまでで、Aランクは魔法と能力の両方を兼ね備えている者で、Sランクは、過去と未来を見ることができる能力と非常に稀な魔力波動の持ち主というような感じです。」
「じゃあ、ユウナはSランクなのか・・」
「はい、私の先祖は代々、Sランクの能力者で私も能力と共に魔力も受け継いではいるのですが・・私の能力は、先祖の持っていた能力のほかにもあるんです。そのせいで魔力と精神力が激しく消耗し、耐えれなくなって、それで気絶するんです。私の予知能力は自分の意思ではなかなか見れなくて、突然見えるので体が耐えられないんです。」
「そうか。」
「この国に来てからは私の国にいたとき以上に、夢のような感覚でしょっちゅう見るんです。その度に気絶するんです。きっと魔力と精神力が不足しているからだと思うのですが・・」
「だから『今回も』なんだな。」
「えぇ。それとこれをお話したのには理由があるんです。」
・・私は、ゼロの好奇心を利用し、さっき見た未来を告げようとゼロが聞くような言い方で話した。
「理由？」
「はい、私、夢を見たんです。これからどこか行く予定はありませんか？」
「あるぞ、馬車で行く予定になっている。」
「馬車で行くのをやめてはくださいませんか？」
「なぜだ？」
「この際、はっきりいいます。あなたは何者かに襲われます。だからやめてくださいと言ったのです。」
「襲われる！？」
「はい。信じないならそれでもいいですが・・どうしてもというならこれを・・」

言いながら、私はポケットから十字架のペンダントをゼロに差し出した。
ゼロは受け取り、
「分かった。俺はユウナを信じる。馬車ではなく徒歩で行くとしよう。警戒していくようにする。
じゃあ、俺は行く。忠告ありがとな。」
そういって、私の部屋から去っていった。
残された私は
・・まさか信じてくれるとは思っても見なかった・・
と驚いていた。

第九章　管理地の視察

ゼロは側近二人に馬車ではなく徒歩で行くと告げた。
なぜかと理由を聞いてきた。俺は、
「ユウナに馬車で行けば何者かに襲われると言われた。馬車では対応できないから徒歩でいけと。」
ユウナの名を出したことには理由があった。
理由はこの側近たちは他言はしないし何よりユウナのことを嫌ってはいないからだ。
話すと長くなるからまた後ほど。
側近は理由を聞き俺の言葉に従い徒歩で管理地のガルーダに向かうと言った。
俺はユウナに渡された十字架のペンダントを首に下げ周囲の気配を探りながらガルーダに向かった。

ユウナの言っていた崖道の通路。右は林。左は崖。
正直に言うと襲われてもおかしくない道を歩いてるなと思う。林なんて襲撃者が一番隠れやすいところだからな。
管理地の視察というのはいたって簡単な仕事だ。管理地に出向き、問題はなかったか、これまでの経過記録などを聞いてくるだけだからな。
それはともかく俺たちは崖道を警戒して歩かなければならない。気を抜けられない。
周囲に怪しい気配がないと確信したそのとき、日の光を浴びてくっきりと俺たちの影が大きな影に一瞬にして消された。その影はどんどん大きくなっていく。思わず見上げると
「！？」
声にならないほど大きな大きな大木が落ちてくるのが見えた。
誰かが故意に落としたとすぐ理解できた。反応が一瞬遅れて後ろに

何メートルか引き下がるだけしかできなかった。

ーーーーーーーーーーーードーーン！！ーーーー
ーーーーーーーーーーーー

大きな音を立てて大木が道を塞いだ。その大木の上に黒い衣を纏った背中に白い翼がある奴が数人舞い降りてきた。

「無礼者！！この方をどなたと心得る！」

・・俺がこいつらの気配に気づかなかったなんて・・・・何者だ？・
・

側近の一人がが怒りを込めたまなざしで叫んだ。奴等は何も言わず呪文を唱えだす。

俺たちも身構え、防御の呪文を唱えだした。

だが、襲撃者のほうが早かった。俺めがけて一直線に光を凝縮した光線で襲わせる。

・・・間に合わない！！・・　貫かれる！！

そう思ったまさにそのとき、バーーン！！と音を立て光線ははじかれた。

光線がはじかれるとき何か結界のようなものが一瞬見えた。

「！？」

その場にいる全員が今、起きたことに驚いた。そのとき、

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーブチッーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーー

俺の首からユウナからもらった十字架のペンダントがすとんと落ちた。

きっとチェーンが切れたのだろう。でもなぜ？

俺は落ちた十字架のペンダントを拾った。所々にひび割れている。

・・・これが俺を・・守ってくれたのか？・・

とにかく俺は襲撃者を見た。まだやるつもりなら今度はペンダントにはもう頼れない。

まだやるかと俺が身構えたとき、突然、襲撃者が姿を消した。

後を追うにも気配も同時に消えたから、追跡不可能。
「ゼロ様！！ご無事ですか！？」
側近の一人が言う。
「あぁ。」
無事で怪我はないと伝えた。側近たちは安堵の息を漏らした。
「ご無事で何よりです。・・しかし彼等は一体何者でしょうか？・・・
呪文詠唱時間がとても短く・・・あの翼も見たことがない・・」
側近の一人、名は、リアーネル。頭が良く勘が鋭い、優秀な側近だ。
「本当にご無事で何より・・そのペンダントのおかげですかね・・
見たところ文様が・・刻まれていて・・・彼等はこの十字架のペンダントを見て姿をを消したと思うのですが・・」
もう一人の側近、名は、リアン。物知りで書物をよく読む。文系だが優秀な側近だ。
この二人は俺にとって特別な存在だ。
「あぁ、このペンダントはユウナからもらったんだ。あいつの予言が的中したな。さて、考えるのは後だ。早くガルーダに向かわないと日が暮れるまで帰れん。そのためには、大木を何とかしないとな。」
考えたいことは山ほどあるがいまはそれどころではない。
『お任せください！！』
二人が声をはもらせて言った。
「先ほど何も助力できなかった分、私たちの名誉と誇りを挽回させるチャンスをください！！」
「こんな大木などゼロ様が手を煩わせる必要などありません！！」
前者がリアーネル。後者がリアン。
そこまで熱心に言わなくとも・・でもそれもいささか悪いものでもないから
「分かった。では、見せてもらおう、リアーネル、リアン。よろしく頼む。久しぶりだな。お前等の実力を見るのは。」

おれは笑った。
『はい！！』
元気良く、そしてうれしそうに笑い声をはもらせて言った。
それぞれ違う呪文を唱えだす。唱え終わったのか、
「はぁ！」
と気迫で炎を出現させる。そして大木を指差し、大木めがけて炎を飛ばすリアーネル。
大木は一瞬にして灰と化した。
「ウィンディフォロー！！」
声と共に小さな風を生み出し、灰をどこかへ飛ばすリアン。
林に炎を移さないように加減しているリアーネル。林に影響が出ないように注意するリアン。
二人が自然を大事にしているのがひしひしと伝わる。
無理もない。なんたって、人の魂と精霊が融合した人型精霊なんだからな。
何で俺がそんなこと知ってるかって？それは次回の楽しみだと言うことにしとくか。
「ごくろう。毎回思うが実にすごいな。さて行くとするか。日が暮れる前には行きたいからな。」
『はい！』
声をはもらせる二人に苦笑し歩き出す俺。

こうして、ゼロと側近は管理地の視察をに行ったのだった。

第十章　ユウナの異変　側近の過去

ゼロは管理地の視察の仕事を終え城に戻った。
そして父上に管理地の報告とともに管理地に行くまでの道のりで襲撃されたことも報告した。
父上は驚いた。
「襲撃者の件はお前の側近たちに任せる。ゼロ、外出するときは気を引き締めろ。また何かあれば報告してくれ。よくやったな。ごくろうだった。」
珍しい。父上が俺をほめてくださった。これまでそうめったにあるものではなかった。
俺と側近たちは王室から退出した。
「では早速、書斎で調査してきます。私が思うにユウナ様にお聞きになられたほうが情報が得られるかと存じますが・・。書斎も少しは役に立つかと思うゆえ、調査してまいります。」
「あぁ。俺もユウナに聞いてみる。書斎で何か情報が得られたら報告してくれ。頼んだぞ。」
リアンの提案を俺は受け入れた。
「御意。」
承諾の意を含んで言葉とともに一礼するリアン。そして書斎に向かっていった。
「では、私のほうは聞き込みをしましょう。主に、異国を放浪する商人や民族にも聞いてみようと思います。何か知っているかと思いますゆえ・・。外出許可をくださいませんか？」
「あぁ。外出を許可する。何か情報を得ることができたら報告してくれ。」
「御意。」
俺はリアーネルに外出許可を出した。
二人とも実行力がある。こういうところは素直に尊敬できる。

リアーネルが行った後、俺は早速ユウナの部屋に向かった。
ユウナの部屋のドアをノックする。ノックしても返事がない。不思議に思って部屋のドアを開けた。
すると、
「!?」
声にならないほどの衝撃がそこにはあった。ユウナは床に倒れていたのだ!!
俺は、はっと我に帰ってユウナを抱き起こす。
「おい!ユウナ!ユウナ!しっかりしろ!」
声を荒げて叫ぶ。
「んっ」
うめいてうっすらと目を開けるユウナ。俺は安堵の息を漏らした。
「おい、大丈夫か?何でこんなところで倒れてたんだ?」
「・・・。」
俺が聞いても反応がない。ぼんやりしていて顔色が悪い。
俺は今聞くのを諦めた。ユウナがこんな状態だと安心して聞くことなんて到底無理だ。
「ユウナ、ユウナ。」
ユウナの体をゆすった。
「・・ゼ・・ロ・・?」
今気づいたような声を出した。さっきは心ここにあらずッて感じの状態だったし無理もない。
「あぁ。そうだ。・・それより大丈夫か?」
「・・うん。・・へいき。」
俺は平気じゃないと思った。まだユウナの体から脱力感が抜けないし何より顔色がとことん悪い。
「大丈夫じゃないだろ。何があった?」
「・・あれからまた見たの・・ゼロの未来が・・それをを知らせようと立ち上がったら・・・。」
「そうか・・もう無理するなよ。そうそう、襲撃者来たぞ。十字架

のペンダントのおかげで助かったが。チェーンが切れて所々にひびが入ってしまったが・・すまなかったな。」
そういってペンダントをユウナに差し出した。
ユウナはいまだ俺から体を離そうとせず、手だけを動かしてペンダントを受け取った。
「よかった・・う”っ」
呟きながらユウナはうめいた。顔色がさぁーと青くなり頭を抱える。
「おいっ！だいじょうぶか！？・・・！！？」
叫んだが最後は声にならなかった。ユウナの左目が突然渦を巻いているように見え瞳の色が変化した！
幻覚だ！みまちがえだ！何度もそう思った。だが瞳は元の状態には全く元に戻らない。
ユウナが突然、左目を手で覆い
「・・ロ・・イ・・？」
と呟いた。
「え？」
俺もその言葉に驚いた。ユウナははっと気づいたように
「ゼロ！！ロイが！ロイが！！」
俺に向かって叫んだ。こんなに取り乱しているユウナをはじめてみる。
・・ロイ？・・何か関係があるのか？？
ユウナはいきなり俺の胸に頭をぶつけた。
「！！？」
いきなりユウナの体がずしっと重くなる。
「ユウナ？」
ユウナを呼びかけても返事がない。少し体を離した。見るとユウナは気を失っていた。
瞳の異変は治まったのかよく分からなかったがユウナの言葉から何か見たことが分かった。
ゼロはユウナを抱きかかえ、ユウナをベットまで運んで寝かせた。

・・聞くのは後からでもできる。・・・
ゼロもユウナも気づかなかったがロイはドアからユウナが自分の名を言っているところを見ていた。
そしてロイはゼロにばれないようその場から離れた。

ゼロはユウナの部屋から出た。そしてリアーネルを見つけた。
「ユウナ様から情報は得れませんでしたか？」
「情報を得れる状態ではなかった。後で聞くさ。」
「そうですか・・ユウナ様はどこか謎めいているところがあります。初対面のときの印象はそうでした。」
リアーネルは窓から外を見上げて言った。
「俺もそう思う。嘘をついているわけではないが何か隠してる、そんな感じだな。」
「えぇ。商人や民族に聞いてきました。翼は能力者や具現魔法の得意な者でしか使えないと。黒い衣はどこでも売っているとも聞きました。」
「そうか、ごくろう。さっきの話だがな、俺な、昔のリアーネルやリアンにもユウナと同じような印象を持ってたぞ。まぁ、昔の話だがな。」

昔、出会ってまだ日が浅い頃、俺が小さかったのもあるが、あまり俺とリアーネルたちとは言葉を交わさなかった。年頃は同じくらいだったのにな。
まだ幼いリアーネルたちを俺の側近にしたのは父上だった。父上とも何か大事な用がないときは話さなかった。だから反対などしなかった。
俺は城の中で最も好きだったのは庭だった。花や木が色とりどりの美しい庭だった。
なぜ庭が好きだったのかはよくは覚えていなかったが、唯一覚えていることは俺もリアーネルたちも、庭にいるときだけが笑える時間

だったと言うことだけ。俺がどこかへ行けば黙ってすかさずついてくる　リアーネルたちが喜ぶのを見てうれしかったのだろうと今は思う。
でも、俺自身も自然が好きだったと思う。
こんな主人と従者の関係を一気に変えたのはあることがおきたからだった。

　それはある年の春の日に庭を散歩している頃のことだった。その日も俺が勝手に動き回り、勝手についてくるリアーネルたち。なんら変わらぬ散歩が日課の毎日。
いつもなら庭を一周し終わってここで散歩が終わるはずだった。
俺はそのとき見つけたのだった。日陰でしなびている一輪の花を。
俺はその花に近寄った。
『？』
リアーネルたちは俺のしようとしたことが分からなかった。
俺はその花を根っこから丁寧に引き抜いた。
『！？』
一体何を！？という風な目でリアーネルたちは見つめてきた。俺はその花を丁寧に日向の花壇へ移し埋めたのだった。このとき
「ゼロ様、何でその花を日向へ移したのですか？」
と自己紹介以外ではじめてリアーネルは疑問を口にした。俺はそのとき
「いけないか？」
と聞き返した。
「い、いいえ。それはいいことだと思います。」
とリアーネルが言った。
「なら、いいな。これできれいな花が咲くな。」
俺は笑った。次はリアンが
「いいことだけど、どうしてそんなことをするんですか？手を汚し

てまで。」
と、問いかけた。
「花がかわいそうだろ。日陰じゃあ、枯れてしまうからな。俺は魔法の加減ができないから傷つけるとかわいそうだし、それに俺はこの庭にあるもの全てが好きなんだ。」
「・・・・」
二人が黙り込むのを見て不安になり、
「変か？やっぱりみんな変だと思うよな。俺の考えを理解してくれない人が多い。」
リアーネルたちに問いかけながら自分に変だと言い聞かせていた。
するといきなり
『変じゃありません！！』
と大きく二人が声をはもらせて叫んだ。
「え！？」
俺は二人の言っていることに驚いた。
「自然を大切にするのも自然を好きだと言うことも変じゃありません！！」
「そうです。むしろいいことです！私たちも自然が好きで大切に思うんです！！」
前者がリアーネル。後者がリアン。
二人が必死で俺に変じゃないと力説して叫ぶことに本当にたじろいだ。
「そうか。そうだよな。じゃもう一週、しようか～。」
俺は笑いながら言った。
『はい！』
二人は声をはもらせて言う。
これが俺とリアーネルたちとの関係が変わった瞬間だった。
リアーネルは、

「そうだったかもしれませんね～」
という。俺は
「かもじゃない。そうだったんだよ。」
と笑って、訂正する。

今ではもう思い出の一つだが、俺とリアーネルたちとの関係が変わってからもう一つ大きな事態が起きることを関係が変わった頃の俺は知らずにいた。知っていたら怖いだがな。

第十一章　側近たちの秘密・想い

昔、庭で俺のした行為のおかげで俺とリアーネルたちとの関係は一気に変わった。
それからまもなく俺は大きな衝撃を受けた。

それは満月の日だった。
その日の夜、俺は眠れず庭に出向いた。曇っていて満月が隠れていた。そしてなんら変わらない静かな夜の庭だと思った。が、そこには、
精霊たちと舞い踊っているリアーネルたちの姿があった。
リアーネルたちに声をかけようとしたとき、満月が雲から顔を出した。
「リアーネル、リ・・・・・!?」
俺は言葉を飲み込んだ。満月に照らされリアーネルとリアンの姿がみるみる変貌していった。
書物で読んだことがある。
精霊は満月の日にこの世に姿を現し、満月の光を浴びれば本来の姿を取り戻すと。
・・リアーネルたちは精霊だったって言うのか。・・ありえない。・・満月の日でなくとも俺には見えた。・・なのに・・どうして・・
「リ、リアーネル・・と、リ、リアン・・なのか?」
俺は声を振り絞って言った。姿を変貌させたリアーネルたちが振り向く。
「ゼロ様!?・・・・はい、わたしたちです。」
「リアーネルと」
「リアンです。」
俺はその姿に驚いた。
これも書物で読んだが、精霊は人の姿をかたどった霊で、かたどっ

ただけで明らかに違うところは数知れず。色、体格、輪郭・・などが違い、精霊ごとに象徴しているものによって風貌が変わるらしいと。
「・・人間じゃ・・ない、のか・・？・・・」
あまりのことにうまく言葉が使えない。
「はい、人間じゃありません。黙っていてすいませんでした。」
リアーネルが申し訳なさそうに言う。
「せ、い・・れい・・なのか・・？」
まだ言葉がうまく話せない。この現状を理解しきれないからなのだろうか・・。
「精霊の部類には入りますが正式には精霊ではありません。」
リアンが言う。
「せい、れい、じゃない？」
少しずつうまく話せるようになった。
「はい。正式名称は、人型精霊です。」
リアーネルが事情が飲み込めていない俺にあわせて少しずつ言う。
「人型・・精霊？」
「そうです。人の魂と精霊が融合して生まれた精霊を人型精霊と言うのです。」
　リアンが言われて書物で読んだことがあったことを思い出した。
人の魂と精霊が融合して満月の日でなくともこの世に具現できると。
そして、その現象は珍しいものではないが完璧にこの世に具現できるのは奇跡に等しいと。
「満月でなくともこの世に具現できるのは私が融合した人の魂のおかげなんです。」
リアーネルが言う。
「精霊にとってこの世の自然は宝も同然。満月の日だけでは少ないと思ったのです。」
リアンが言う。
「それで・・人の魂・・」

呟いた俺に
「はい。この世で生きるすべを失った人の魂を使ったのです。精霊の精神力に人の魂をもってすればこの世に具現ができるだろうとの考えを持ったのです。」
と、リアーネルが言う。
「でも、それは難しいんじゃないのか・・？」
「はい。大きなリスクを必要としました。満月の日まで本来の姿と力が取り戻せず、なおかつ、人の魂とシンクロしなければならないんです。」
「難易度の高い方法でした。この世にずっと具現していたいと強く願う者だけがこの方法で挑戦しました。結果、断念するもののほうが多かったようでした。」
「それに欠点がありました。精霊は寿命などありませんから何年もの長い時をすごしますが、人間には、１００年と言う精霊にとても短い寿命しかシンクロした状態でいることができません。これが誤算でした。一度シンクロをとくと長い間この世に具現できなくなってしまいます。この世を慈しむ我々にとって大変苦しい誤算となってしまいました。」
・・だろうな・・と思った。
今まで話してもらっていくつか謎だったことが解明された。
一つ、精霊は、自然を大事に思っている＝リアーネルたちが自然を好きな理由。
二つ、今思い出したが精霊は魔法を作り出した張本人だ＝力を制限されても強い。
三つ、精霊は自分の象徴しているものにより姿が違う＝魔法は、一種類の系統しか使えない。
などなど。特に一つ目は一番疑問に思うものだった。
俺は今まで自然を好きだといった奴らはリアーネルたち以外皆が変といっていたからだった。
「そうかそういうことだったのか。」

「納得しましたか？」
「あぁ。」

こんな秘密を打ち明けられてびっくりしたゼロだがこれからもいつもどおりもしくは今まで以上に楽しくやっていけるだろう
と思うゼロであった。

第十二章　ゼロの想い。

ゼロが管理地の仕事を終えたその翌日。
改めてゼロはユウナに聞こうとユウナの部屋に向かった。
・・ユウナが『ロイが！』と言ったのには理由があるはずだ。・・
瞳のことも何か関係が・・
昨夜、ユウナは十字架のペンダントを見て様子が変わった。俺が襲われたことと何か関係があるかもしれない。
そういった考えでユウナの部屋へ向かったゼロであったが、どうやら先客がいたらしい。
ユウナの部屋からロイが出てきた瞬間俺と目が合った。
「ゼロ殿もユウナの様子を見に来たんですか？」
ロイが聞いてくる。表情と言葉からして言いたいことはそれだけじゃないと俺には思えた。
「あぁ。」
不機嫌そうな表情で言うゼロを見てロイは
「ユウナと仲が良いんですね。ユウナはゼロ殿のことどう思っているんですかね～。気にならないんですか？」
ゼロをあざ笑うような言い方で言った。
「くっ！」
ゼロは小さく歯を食いしばった。それを見てロイは小さく笑い
「あ、そうそう。ユウナはまだ寝ていますよ。昨日よりは顔色が少し良くなったようでした。では、また・・。」
思い出したかのように言う。そして自分の部屋へと帰っていった。
「あいつっ！」
舌打ちしたい衝動に駆られた。
・・あいつに言われるとやけにむかつく。何だあの態度は。俺を馬鹿にしやがって。
少し自分を落ち着かせてユウナの部屋に入った。

ユウナは無防備な寝顔を見せて寝ていた。俺は近くにあったいすに座ってユウナを見つめた。
いすはこの間、ないと不便だろうと持ってこさせた物だった。
ユウナの寝顔からしてロイの言ったとおり顔色が少し良くなりつつあると分かった。
睡眠の邪魔しちゃ悪いと思っていすから立ち上がったとき、
「うっ。」
ユウナがうめいた。俺はユウナに近寄って、
「大丈夫か？」
と聞く。
「ゼロ？・・・・大丈夫。」
ユウナは頭を手で触りながら起き上がる。
「・・なんか・・ぼやぼやする・・・。」
ユウナが言う。ユウナの瞳を覗くとユウナのいうとおりまだぼやけてると言った感じで視点があっていないようだった。
「ユウナ、・・・昨日のことだが、ユウナが気絶する前に言った『ロイ』と言う言葉・・あれは一体どういう意味だったんだ？」
どうしても聞きたかったことを聞いた。
「え？ロイ？私、そんなこと言った？」
え！？言ったことを覚えていない！？記憶がとんでる？ありえん。
「え！？じゃあ覚えてないのか？」
俺の言葉にユウナが思い出そうとしていた。
「う～ん、言ったかな？いやでも・・・・・・・・・うぅ！痛い・・頭が・・・。」
ユウナが思い出そうとして突然頭を抱えだした。
「・・いたい・・うぅ、いたい。」
うめきながらベットから落ちそうになった。
「ユウナ！」
慌ててユウナに衝撃を与えないよう俺がクッションの変わりになってユウナを抱く。

俺の体にユウナは自分の体を預けながら頭を抱えていた。
これ以上思い出させるのは無理と悟って
「もういい。思い出そうとするな。・・・ユウナの能力は使うとき何か体に異変が起きないか？」
「・・・異変・・・。」
「そうだ。」
「・・・たぶん起きると思う・・。自分じゃ分からないけど・・」
「そうか・・」
俺はユウナの髪に触れた。
「・・・もう無理はするなよ。まだ体調が悪いのに負担かけて悪かったな。」
「・・・・」
「ん？どうした？」
「・・・見える。」
「え？」
ユウナが振り向いた。左目の色はまた以前のように変わり渦を巻いていた。
「・・嘘だよ・・ロ・・イ・・が・・犯人・・なんて・・」
「！？」
一瞬ユウナが何を言っているか分からなかった。
だが確かに、

『ロイが犯人』

と言った。
もしそうなら証拠があればうまくロイに負けを認めさせることができる。
ユウナはいまだに信じられないようでいる。ユウナは突然、俺の背中に腕を回してきた。
「ユウナ？」
俺は戸惑った。が、ユウナは震えていることがわかると俺もユウナ

の背中に腕を回し強く抱きしめた。
「・・ゼ・・ロ・・・！・・・ロイを・・止めて・・騒ぎを大きくさせないで・・ロイは・・・私の・ため・・・な・・ら・・しゅ、手段・・を・・・えら・・・ば・・・・・な・・・い」
「・・ユウナ・・・」
俺はもとからそのつもりだった。
ゼロの背中に回されていたユウナの腕が力が抜けたせいなのか俺の背中からユウナからの圧力が消えた。
このときユウナは気を失ったのだった。
それでも俺はユウナを抱きしめ続けた。
俺がこんなにユウナのことを想っているのに、この想いは伝わらないだろうか？
ロイにユウナを想う思いまで負けてしまうのだろうか？
ゼロはユウナと過ごすうちのユウナに惹かれていった。
この思いは自分ではどうすることもできない。
ロイは・・・ロイはどうだったんだろう・・・
ロイにとって俺は邪魔な存在だったんだろうか？
それとも俺は眼中になかったんだろうか？
どちらともかもしれないが、もう俺にはこの思いは止められない。
ユウナがロイに思いを寄せていたとしても俺はユウナを諦めたりしない。
俺はこの感情には素直でいようと思った。

第十三章　神の力と神の信者

ゼロはユウナをベットに寝かせ部屋から出た。
ユウナはここ最近、気絶することが多い。ユウナの言うとおりしょっちゅう能力が勝手に発動したんだろう。だが、ユウナの能力が発動するたびに俺にいろいろな表情を見せるのも確かだ。
そして、ロイとユウナが話しているところを見るといてもたってもいられなくなる。
俺はロイに嫉妬している。ロイに見せるユウナの表情は俺には向けられることはない。
そう思うと余計ロイが憎い。ロイをこの世から・・ユウナの前から消したい。
だがロイを傷つければユウナが悲しむ。それだけはしたくない。
矛盾している二つの感情が俺を苦しめる。
俺は矛盾している二つの感情を抑えることができないが一つの考えが生まれた。
それを実行するために書斎にいるリアンのところへ向かった。
リアンを呼び戻した。そしてリアンから、、
「書斎の書物はほとんどが魔の国のことについてでしたが三国が対立する前の時代の書物がいくつかありました。そして神の国について記されている書物にこんなことが書いてあったのです。」
リアンの示す書物の内容を俺は読み上げた。
「・・・三国の一つ、神をあがめ、祭る種族の住まう国、その名を神の国と人々は呼ぶ。
神こそ偉大なものはないと信じる民の背中に白い大きな翼が生えんとする。人々は神の翼と呼び恐れる。民はその翼をもってして神に己のすべてをささげ、神の力を得た。
神の力、それは、神のようにすべてを見通し、神のように自分のためならず人のために使い、神のように振舞う力。

その強大な力、人間には大きなリスクを背負わんとする。己のために神の力を使ったのなら神の力は失い、神の力で人を縛るのなら天罰が下されるだろう。
神の力を持つ者、心はきれいで何者にも染まることのない純粋な心でいる者が多く、いまだかつてその力己のために使ったものは誰一人いない。」
俺が書物を読み終えたそのとき、
「ゼロ様、ここにおられましたか。実は私のほうで驚くような情報が・・・」
リアーネルがきた。
「何だ？早く言え。」
俺はせかした。
「ユウナ様の十字架のペンダントはロイ様の国のもので神を信じる者の証だそうです。その十字架のペンダントを見て襲撃者は逃げたのと関係があるかと思い調べた結果、神を信じるものは十字架のペンダントには攻撃ができないのと神の力はその十字架によって効果を強くする増幅器だそうで、逆に攻撃を受けた場合、ある程度なら防御が可能だとのことです。襲撃者が逃げたのは、神の信者だからじゃぁないですか？」
俺とまったく同じ考えを言うリアーネル。リアンも頷いている。
俺も思った。ユウナの言葉で大体予想はしていた。ロイの言葉からも引っかかるところがあった。
これはどうやらロイを探るほかなさそうだ。

第十四章　ロイをおびき出す策

　ゼロは気を失っているユウナを自分の部屋へ連れ込んだ。
ゼロはあの後リアーネルたちとロイをおびき寄せる策を思いつた。
そしてその内容はというと・・・・・。
「渡してきました。これで時間の問題かと・・・。よろしいのですか？これは『賭け』ですよ。」
リアーネルが言う。俺はユウナの頬をなで、
「賭け？いいや違うぞ。これは賭けじゃない。罠だ。ロイを引っ掛ける姑息な罠だ。」
と訂正した。
「そうですが、こない可能性や他の方々にばれることもありえるんですよ。」
「それはそうだが、それも大丈夫だろう。なにせ神を崇める者たちだからな。」
自信満々に言うゼロに対し、やや不満顔のリアーネル。
　リアンはというとロイの監視をしてもらうように命令を下したから現在ここにはいない。
リアンは元は風の精霊である。風に溶け込み姿と気配を隠し、傍にいても気づかれないということを生かしてのものだった。テレパスを使って脳裏に随時、報告をしてくる。
　ここで少しロイをおびき寄せる策を明かすとしよう。
リアーネルが先ほど『渡してきました』といった。
誰にかと言うとそれはロイの従者だったりする。俺の命令での行動だ。
リアーネルは故に心配したのだ。ロイの従者がロイに手渡すかどうかを。
ロイの従者が怪しむことなくロイに渡してくれればいいがそれでは面白くない。

『少し面白くなるように少し相手が怪しむようなことを少し言って来い』
と命令してそれを果たしたからそれ故にリアーネルは心配したのであった。
リアーネルが『賭け』と言ったことも納得である。
リアンはというと、ロイの従者とロイを監視し様子を随時報告と言う命令を下して監視中である。
理由は俺の思惑にはまるかどうかの確認と言ったところだろうか。
おっと、これ以上言うと面白くなくなるな。策の内容はぼちぼち分かるだろう。
ゼロの脳裏にリアンの声がした。

〔ゼロ様！ロイ殿が一人でゼロ様のほうへ向かっています！すごく取り乱しております。
私もゼロ様のところへすぐいきます〕

リアンの声が消えて何秒も立たないうちにリアンがパッと現れた。
さすが風の精霊（使い手）だと感心した。
「リアーネル、リアン！打ち合わせ通りに行くぞ。風の結界と幻覚を頼む。俺の合図でやってくれ。」
そう言った直後だった。ものすごい速さで扉が開かれ閉まるのは。
「・・これはどういう意味だ？ゼロ殿。」
声とともに現れたのは紛れもなくロイだった。
俺は目でリアーネルたちに合図を送る。
俺は心の奥底でロイの反応に驚愕した。
声こそ荒くはないがロイのかもし出す雰囲気と迫力が怒りで満ち溢れている。
言葉では言い切れないほどロイの怒りはオーラのように漂い俺たちを怖気づかせる。
俺はごくッと唾を飲み込んだ。

第十五章　おびき出されたロイ

俺はテレパスでリアーネルたちに合図を送った。
リアンは見えない透明な風の結界を。リアーネルはロイに気づかれないように幻覚の準備に取り掛かる。
ロイは俺がリアーネルに渡したものを突き出して、
「どういうことだ！！？」
と怒鳴る。
その渡したものとは・・
『　　ユウナは預かった。
返してほしくば一人で俺の部屋まで来い。
追伸：　さもなくばユウナの心も貰い受ける。
byゼロ　』
という内容が書かれている羊皮紙であった。
怒るだろう、そして必ず来るだろうと思い書いたものだった。
そしてゼロの思惑通り物見事にロイは、はまってくれたのだった。
「書かれたもののとおりの意味さ。」
俺は平然に言う。
「なぜこんなものを私に！！」
まだ激怒しているロイ。
俺は気を失ってるユウナの腰に手を引っ掛け抱き上げた。
「！？」
ロイは目を大きく開いた。
「ロイはユウナが好きなのだろう？だから俺の前に今現れたんだろ

う。違うか？」
「くっ！！」
ロイは図星のようだった。
「そして、ユウナを思うがゆえに俺を襲わせた。違うか？」
本題はそこにあった。
ことの真相を明らかにするためにこの策を実行したのだった。
ユウナをロイをおびき出す餌として。
「僕がゼロ殿を襲う？いくらユウナを僕がすきでもそんなことは・・・」
ロイはとぼけた。だが、とぼけるのは下手のようだ。
表情には僕がやりました！と書かれているかのようなあせっている表情だった。
「とぼけても無駄だ。しっかり証拠をつかんだ。ならロイが本当に俺を襲わないか試してみるか？」
俺はそういって、ユウナの口を自分の唇で塞いだ。
ユウナは気絶していたが意識をこのとき取り戻した。
「んっ・・んぅ」
わずかだがユウナから聞こえる甘い声。
ロイの表情が今までと比べきれないほど怒っているかがわかった。
後もう一押し。
一回、唇を離し、また唇を塞ぐ。
「んっ・・はぁ・・ぜ、・・んっ、んん」
ユウナは俺に何か言おうといているがかまわず唇を塞ぎこむ。
ユウナはいきなりのことで頭が真っ白だった。
ただ、強引にキスをしてくるゼロから離れたくてもがいた。
だが、もがく私をゼロは押さえつけ、唇を離し呼吸ができるぐらいの間を空けさらにまた唇を塞ぐ。
何回もゼロと繰り返す強引なキス。
だんだん体から力が抜けてきたころ、驚くことをゼロがした。
「んっ、・・はぁ、ぁ・・ん、んぅ！？」

唇が重なり合う中ゼロがいきなり舌を入れてきたのだ！！
ゼロの舌は、私の口の中で動き回る。
もがくが、体から力の抜けた私にはどうしようもない。
　ゼロは、ユウナが後からなにを言うか不安になっている中、早くロイが止めにこないかとキスをし続けていた。
そんな時ロイがゼロに向かって攻撃してきた。
が、その攻撃は、リアンの風の結界でふせがれてしまった。
俺はユウナから唇を離した。
ユウナは、はぁ、はぁ、と荒い息をする。ユウナはゼロに体を預けるような格好だった。
ゼロはユウナを腕で抱き上げた。
ロイは、ゼロをにらんでいる。
リアーネルの幻覚により、ロイも自分の意思を抑えることができなかったと俺は思う。
「ロイ、認めろ、自分のしたことを。それともうしないと誓え。このことを公に出されたくなかったらな。」
「くっ！！」
ロイはきっと俺が許せなかったんだと思う。だが、ロイに同情してユウナを譲るわけにもいかない。
「お前の思いが分からないわけではないが、こいつは俺のものだ。ユウナはお前が自分のために手段を選ばずに行動することに悩んでいた。お前の力は貴重な力だ。ましてや他国の王子となれば、代償は大きいぞ。その力は自分のために使用すれば失うと聞いた。お前、このままだといつ力を失うかわからないぞ。自分の行動には気をつけることだな。」
俺はロイに言った。
「あぁ。認めるよ。もうしない。それに滞在はそろそろやめにしようと思ったところだ。
いい機会だ、明日、ここをたつとしよう。あ、それと、ゼロ、ユウナの嫌がることはしないでほしいな。」

そういってロイは部屋を出て行った。
「終わりましたね。」
リアーネルが言う。
「あぁ。」
俺は答える。
ユウナは今の話を聞いていたのか不安だったがおそらく聞けてはいないだろう。
リアーネルの幻覚のおかげで。
ユウナはぼんやりとしている。
「大丈夫か？」
俺が声をかける。
「ゼ・・ロ・・？」
ユウナが呟いた。
まだ完全に意識が戻っていないようだ。
それは、俺のせい？それとも幻覚のせい？もしかして、その両方か？
俺はユウナを自分のベットに寝かせた。
「それにしてもロイ殿はすごい力をお持ちですね。」
リアンは呟く。
「あぁ。おれさえもみきることができなかった。」
俺もそれには同感だった。
「おそらく、リアンの風の結界がなければ防ぐことはできなかったでしょう。」
リアーネルは言う。
俺もそう思った。
リアンたちは精霊だ。神の力を持つ人間の力を防げるものはそうめったにいないと断言できる。
精霊のリアンたちでなければ防ぐことなどできなかっただろう。

こうして、ゼロの作戦はもの見事に成功したのであった。

第十六章　ゼロ、ユウナに告げる。

ユウナは自分のベットで目を覚ました。
「・・・・っ」
夢でゼロとキスしてしまった。というか、ゼロが強引にしてきた。
私の力ではどうすることもできなかった。夢のはずなのに妙にリアルだった。
なんかすごく恥ずかしい。自分がロイ以外に自分でない自分を見せてしまうことが信じられなかった。
これは夢。これは夢。と心の中で呟いていたとき、部屋のドアが開いた。
「目が覚めたか？」
そう私に聞くような形で近づいたのはゼロだった。
私はゼロの顔をまともに見れなかった。
「ん？どうした？顔が赤いぞ？大丈夫か？」
私のあごを持ち上げ、私の顔にゼロは自分の顔を近づけるように私を見てくる。
「だ、大丈夫です。」
なんとか目をそらしながら言う。
ゼロはこのときほっとした。
ユウナは俺とロイの会話を覚えていないようだったからだ。
「ユウナが起きた後に言おうと思ったことなんだがな・・。」
俺は早速、言おうと思い話題を切り出した。
「な、何ですか？」
「ロイがな、長期滞在って話だったがあっちの都合が悪くなったみたいで昨日帰ったんだ。」
簡単に話した。
実を言うと、ロイのしたことを俺が知ったから、ロイは俺に何もしないと誓い母国に帰っていった。っていうだけの話だけどな。

「え？」
ユウナは目を見開く。
「ロイが、『自分のすることにはしっかり責任を持つよ』といってたぞ。」
「そ、そうなんですか・・・。」
ユウナの反応はさびしいものだった。
無理もなかった。
ユウナはロイに挨拶ができなかったんだからな。
「あのこと・・・言ってくれたんですね・・・。」
「あ、あぁ。」
ユウナは何か心残りがあるようだった。
ユウナは、
・・・ロイに一言言いたかったな。会えて、一緒に過ごせて楽しかったと。一言だけで一目見るだけでよかったのにと。
と思った。
ゼロはユウナを突然、抱きしめた。
「？」
ユウナはわけが分からなかった。
ゼロはユウナの表情を見て、つい、抱きしめてしまったのだった。
ユウナの表情・・・それはまるで、何かにおいていかれたもののように悲しく、はかない表情だった。
ユウナは思わず顔を赤く染めた。
夢でのキスといい、今といい、いったい何なんだと言う感じで。
今まで、こんなに自分を乱すようなことはゼロやロイに出会うまでなかった。
ゼロやロイに出会って、さまざまな感情が心からあふれ出した。
恋というのも知ることができた。

私はロイに会う前まで一切感情が揺れ動くときはあまりなかった。
唯一、感情があふれ出したのは、お母様が亡くなったときだけだっ

た。
お母様が小さいころなくなって、ロイに出会うまで私はまるで心のない人形のような存在だったと従者が言っていたのを聞いた。
ロイに出会い、はじめは自分と重ねたのかもしれない。
自分とどこか共通しているところがあると思ったのは私だけではなく、ロイも思ったことを聞いた。
ロイも私もはじめて会ったときと比べられないくらい変わったと従者に言われた。
そんな私とロイは次第に惹かれていった。
そしてそのとき、初めて恋というのを知ったんだ。
ロイに会えることは日に日に少なくなっていった。
それは自分たちが一番知っていたことだった。それでも、自分の思いは止められなかった。
自分たちは恋をしてはいけない立場であると、けして結ばれることはないと分かっていても、自分のあふれ出す思いはとめることはできなかった。
日をおうごとに増していく気持ち。
会いたい、さびしい。そんな気持ちが心の中で渦巻いていた。
そんな時、お父様に言われたのだ。
「魔の国に嫁げ。」
と。
いやだった。お父様は私の気持ちを知っていてなお私に言っていることに怒れた。
次第に私の高ぶっていた気持ちは徐々に冷めていった。

　そして、ゼロに出会った。
そんなことは出会った当時はどうでも良かった。
でも、ずっと気にせずにいることはできなかった。
こうして抱きしめられていると、ゼロの気持ちがなんとなく伝わっ

てくる。そんな気がした。
「ユウナには、俺がいる。俺を頼ってくれ。お前は俺の妻なんだぞ。」
ゼロが私を抱きしめながら言う。
「ユウナ、お前が俺よりロイがすきなのは分かっている。その気持ちは自分では止められないことも・・・」
ゼロはゆっくりと私の背中に回していた腕を少し離し、今度はゆっくり顔を近づけてきた。
私は、あまりのことに体を動かせなかった。
そして私の唇にゼロの唇が重なった。
ゆっくりと重なった唇だが、次第にゼロが舌まで潜り込ませてきた。甘いとろけるようなキスだったが、次第にそれは強引になってきた。
「・・ん、んぅ・・・・ん、んんっ」
私は必死に自分の声を抑えた。
それでも甘い声は出てしまった。
ゼロは唇を離し、再び抱きしめてきた。
「俺はユウナが好きだ。この思いは自分では止められないっ。ユウナ、お前が悲しむのは見たくない。ユウナは自分で必死に心の中に自分の思いをしまっているが時々顔に出る。さっきもそうだ。ユウナの悲しむ表情は見たくない。ユウナ、俺に隠し事はしないでくれ。力になるから、ひとりで問題を抱え込まないでくれッ。ユウナには俺がいるんだから。」
ゼロは必死でユウナに自分の思いを告げた。
「ゼ・・ロ・・・」
ユウナは呟くことしかできなかった。
ユウナもゼロの背中に腕を忍ばせた。ゼロはそのことに驚いた。

第十七章　ユウナ　ゼロに告げる

ユウナはゼロを抱きしめた。
というより、抱きしめ返したって、言ったほうが的確な表現だったかもしれないが。
「ゼロ・・私はロイへの気持ちはずっと永遠に変わらないと思っていたの・・」
「・・・・。」
「でも、変わってしまった。ゼロと出会って、ロイとは全く違う貴方なのに・・・・。」
「・・・・。」
「何でだろう・・。自分でも分からないの・・。ただ、ロイとゼロ・・二人と出会って私は変わったことだけはいえるの・・。私はこれまでにない感情がここに来て押し寄せてきた・・。」
「・・。」
「その感情に私は戸惑ったのよ・・。でも気づいた。・・私はね、ゼロもロイも好きになってしまっていたことに・・。」
「ユ、ユウナ・・？」
ゼロは私の言葉に戸惑っていた。
私も自分で言っていることに驚いてはいたけれど。
「時間差はあったけれど・・二人を好きになったと気づいたとき、私はそれを否定してたのよ。でも否定しきれなくなった。・・ゼロとロイ・・二人を重ねていたのかもしれない・・さっきも言ったけど・・ゼロもロイも全く違う人柄なのよ。なのにどこか共通するところがあったんだと思う。」
「・・・共通点・・・・」
「うん。・・ロイは、自分の苦しみを人に見せるような人ではなかった。隠しているのよ、ロイは自分の思いを。ゼロは・・・気づいてないかもしれないけど、よく顔に出ていたよ。自分の感情が隠し

きれてはいなかったのがすぐに分かった。・・・隠してる・・隠そうとしてる・・少し違うけどそこに惹かれたんだと思う。」
私の言葉でゼロは私の腕を軽くつかみ、目を合わせようとした。
「俺はお前が好きだ。お前が来て俺は変わった。もう一回言う。俺はユウナが好きだ。」
言葉とともにゼロはキスしてきた。私はもがくことしなった。
体がようやく受け入れてくれたのかもしれない。
でも次第にキスは私の口の中まで入り込んできた。
それとともにそのゼロから感じる熱さが染み渡った。
「んぅ・・・んっん・・んぅぅ」
甘いキスに私は溺れた。
何も考えられない。
私の声を聞いて、ゼロがキスをより深めた。
重なり合う唇。ゼロの思いがそこから流れ出てくるよう。
夢はこのことをいっていたのかな?
それとも、もう前にしてたりとか?まさかね・・・。

ゼロはユウナの言葉を聴いて、キスしたい衝動に駆られた。
衝動は止められなかった。いや、止めたくなかった。
ユウナをなぜ好きになったかは、はっきりしていない。
だが、婚姻の儀でキスをしたときもう心にユウナを焼き付けていたのかもしれない。
意識し始めたのはそのときからだった気がする。
今もユウナの甘い声は俺を混乱させた。ユウナの声は俺を操る道具のようだ。
俺は自分を止められない、止めることができない。
そうさせたのは全部ユウナのせい。
ユウナの声が、体が、行為が、ユウナの存在自体が、俺をおかしくさせる。
ユウナを見ておかしくなるのは俺だけではなかったと思う。おそら

くロイも・・。
ロイはユウナを一番に考えていた。その考えが自分の思いをせき止めていたのだと思う。
ロイは自分より、ユウナを最優先しているのだ。
俺は自分の思いを止めるつもりはない。かといって、ユウナを手放すつもりもないが。
俺は自分の気持ちは時と場合によって優先するか決めたい。でも、自分の思いを優先しそうだが。

ユウナもゼロもめでたく両思い。めでたしめでたし。
で、終わらないこと告げておこう。

第十八章　ロイの潔さ

ゼロはユウナを抱きしめている中、ロイについて考えていた。
・・・なぜあんなにあっさり国へ帰った？・・・もっと反抗するかと思ったのだが。
ロイは素直に帰っていった。
それが不思議で仕方がなかった。あれほどユウナを思っているロイがこうも簡単に引き返した・・・。
そこが今になって気になり始めた。

先に言うが、ロイとてユウナを簡単に手放すことなんてできるはずもなかったんだ。
ロイにとってあのときの場は不利だった。
ではなぜロイがゼロに従ったのか・・・・それは、ゼロがロイを呼び出す以前ロイのみにあることが起こったからだったのがきっかけだった。

ロイはその日も優雅にゼロの城で滞在を楽しんでいた。
ロイのお供としてロイの母国の城で仕える従者をつれてゼロの城へ『国と国の友好をを深める』を名目に訪れた。
ロイ自身それはただの口実にしか過ぎなかったが。
それは別の話で、その日以前からユウナとゼロの関係がロイにはとても気がかりだった。
ユウナはゼロのことを意識している風でもなかったが、ゼロはユウナを気にかけていたことはロイにも分かった。ゼロはやたらと自分の思いを表情を表に出しているとロイは気づいていた。

ユウナにゼロのことを聞いてみようとロイが思ったとき、ロイの従者が

「ロイ様へお手紙です。差出人はこちらにかかれておりますが・・・・。」
といってロイに手紙を渡す。
「ありがとう。」
そういって受け取り差出人の名を読む。
・・
差出人の名は『ユイ』
その名にロイは心当たりなど何もなかった。あるはずもなかろう。
面識だってそんなにないのだから。
ロイは、この手紙の差出人はゼロの兄上であるゼリム殿のの婚約者だと思い当たった。
何だってそんな人が手紙など・・・
そう不思議に思いながら恐る恐る手紙の封を開いて読んだ。
して、その内容は・・

はじめまして、私ユイと申します。
手紙でのご挨拶をお許しください。
して、手紙をあなたに送った理由ですが、
それは私があなたと少しお話をしたいからなのです。
少しお時間をいただけないかしら。
私もいろいろ都合がございましてなかなか対面は難しいとはいのです。
存じますが、どうしてもあなたとお話がしたいのです。
あなたのほうから都合の良い時間をお知らせください。
してその方法ですが、私に仕えているものは皆、
青い鳥の文様が左胸のところにつけられてい

るので、
その者に都合の良い時間の書かれているものを渡してください。
私もその者を通して都合の良い時間をお知らせしましょう。
尚、このことは他言されませぬようにお願いいたします。
私の一方的なお願いでご迷惑をおかけしました。
あなたと会う日が待ち遠しいです。　ユイ

という内容だった。
この内容を見て、ロイはユイ殿に会おうと、以降、手紙を送った。
ロイはその後、ユイと対面した。
そしてユイと話をした。
だが、ロイはユイの言葉に共感はできなかった。反対もしなかったが。ロイは、
「このことはゼロ殿には言いません。似たような感情を持っていますからね。その話、乗ろうと思ったとき、また、こちらから出向くことにいたしましょう。それでは、またいずれ。」
この言葉を最後に、ユイから去った。

そして、ゼロに追い出されるような形でロイは自分の母国に帰ってきた。
ユウナのことを諦めているわけではない。
だからこそ、また、ユイ殿に接触してみようと思うのであった。

第十九章　ユイとの接触

ロイは母国でユイ殿への手紙を書いた。
そして従者にそれを渡し、ユイ殿に仕える者に渡すよう命じた。
その返事はすぐに届けられた。
手紙の返事は・・

ロイ殿が分かってくれてとてもうれしいですわ。
神の国と魔の国の国境でお待ちしています。
ユイ

という返事であった。
予想通りの返答だったとロイは思う。
ロイがはじめて直接話したときのユイ殿はそれはもう、ゼロへの想いとユウナに対する嫉妬でみなぎらせていた。
このままではユウナに被害が及ぶ。そう焦った。
ユイはゼロのそばに自分ではない女性がいることにいらだっていた。
ユウナを除いてこれまでにもゼロに近づいてきた女性は多かったらしい。そのたびにユイはその女性たちをもの見事に追い払っていたという。
今回は毒の一件もあって自らで向くことができなくなってしまい毎日、ゼリム様（ゼロの兄）と退屈な生活をしていたらしい。
だが、そんな中、自分とユウナの情報がユイに届いた。噂もあって尾ひれもついていたそうだが・・。
それを聞きつけて自分に接触してきたんだと思う。
毒の一件があったからこそ、ユイの提案を拒否した。
こんな人の話にのったら・・・。
その後のことを考えると体が震える。
ユウナを取り戻すという利点は大きなメリットだが、そんなことを

したら国との争いに発展する可能性がある。それは避けたい。そう思っていた。
だが、ゼロとあんなことがあって、国よりユウナのほうが何倍も自分にとって大切だと思い知らされ考え直させられた。
そして国を捨てる覚悟でユウナを取り返すことを誓ったのだった。

夜、神の国と魔の国の国境沿いに建てられている大きなホテルで自分とユイはおちあった。

ホテルの部屋に案内され二人きりになると、早速、ユイが
「考え直してくださって本当にうれしいですわ。では、確認したいのですが、ロイ殿はユウナ様を取り返したいのですよね？」
話題を切り出し、聞いてきた。
「えぇ。そうです。」
ユウナを取り戻すためならもう何も迷わない。
「で、私は、ゼロ様と一緒にいたいということで、今日ここに会うと約束いたしましたが・・私があのときに言った策でよろしいんですか？」
遠慮がちに言うユイ。
「ユイ殿の策も良い思いつきですが・・・少し訂正しても良いですか？」

ユイ殿が思いついた策・・・それはこのような策だった。

ユイ殿がゼロを呼び出し、または時間を稼いでいる間ロイがユウナを取り戻すという策。
一見簡単な策だと思うのだが、よくよく考えるとリスクはかなり大きいものだといえる。

過去にユイ殿はユウナに毒を盛っている前科があるゆえゼロは警戒する恐れがあること。

ユウナにはゼロは自分のことを言ってはいないだろうが自分の言葉にユウナはすぐには聞いてはくれないだろうということ。

二つもリスクの高いものが付きまとっているのだからこの策は成功する確率が低いといえる。

それにすぐに犯人が分かってしまう。

ユイ殿はゼリム殿の婚約者だ。前の前科があるゆえ、すぐに疑われてしまう。

疑われ、脅かされて、もしユイ殿が自分のことをしゃべってしまえばそれこそ騒ぎは大きくなる。

それは避けたい。

そこでロイはユイ殿にこの策に負担される大きなリスクを話した。

「では、いったいどうするんです？」

ユイ殿が尋ねる。

「薬を使うんです。ゼロ殿には眠り薬を・・・。ユウナには特殊な効果を発動させる薬を・・・。」

「薬ですか・・？ではそれをどうやって・・？」

「この作戦は夜に行います。ゼロ殿の部屋にユイ殿は薬の香りを漂わせる匂い袋を見つからないようにおくことができますか？」

「えぇ、たぶんですが・・・。合鍵を持ち合わせているので・・・。ですがそうすると私が疑われるんじゃ・・・・。」

「えぇ。そうなるでしょう。だから、その日はユイ殿には何らかの理由で外出してください。それにその匂い袋もある程度時間を置かないと薬の効果が発動しないという特殊な薬を用意しますので。そうすれば、ユイ殿、貴方は疑われることはないでしょう。」

「それを聞いて安心いたしました。ですがそうだとすると、ユウナ様を連れ出すときに背負うリスクは高いままですよ？」

「それは大丈夫ですよ。僕は魔法も薬の扱い方も上手ですから。」
ロイはにこっとユイに笑いかけるのであった。

その日は策の実行予定について話し合った。
そしてついにその実行する日が訪れたのだった。

ロイのユウナへの想いと、ユイのゼロへの想い・・・
二つが共鳴しあって、ゼロとユウナに襲いかかる!!

第二十章　ユウナ奪略策

ゼロは日中、国務に追われている。
休む時間なんてありはしない。
それは今の国王が病で伏せておられるからだった。
国王が病に伏せられる前は、ゼロに国務の仕事などそんな忙しくなるほど回ってはこなかった。
だから、国務の仕事を手際よくこなすことができない状況にあった。
手際よく国務をこなせない俺が悪いことだが、国務の仕事が回ってきてから、ユウナと合う時間が少なくなっていった。
ユウナは別にそんなことどうでもいいという表情をしているのが悲しくて仕方がないゼロだった。
早く仕事を終わらせようと、張り切るゼロだった。

今日、ユウナがロイの策によって奪われることも知らずに。

ユウナはその日、部屋で今、はまっている編み物をしていた。
ゼロにあげるためである。暇つぶしとも言うが。
ゼロはこれまでに私を何度も助けてくれた。
せめてものお礼である。

ユウナは暇つぶしに編み物、ゼロは忙しく国務。
ユウナを奪うにはちょうどいい日であった。

ユイは計画を実行した。誰にも見つからないように慎重にことを運んだ。
そして、理由をつけて従者とともに外出する。

夜

ゼロは自分の部屋に戻った。何かいい香りがする。
疲れを癒すような香りが部屋に充満していた。
ゼロは眠くなってきた。そして気絶するようにベットに倒れこんで寝た。

ユウナは、編み物をきりのいいところまでやって終わった。
ベットに寝に行こうとしたとき、窓からコンコンと音がした。
ユウナはぎょっとした。
この部屋は城の中。
城の中でもここの高さは低いほうだけど、地面からここまで、普通降りたら即死ぬような高さにある。
それ故にぎょっとした。
恐る恐る、窓を開くと、
「ユウナ、会いたかったよ。」
ロイがそういい、抱きしめてきた。
「え？」
何でこんなところに？だって、ロイは帰ったはずじゃないの？
私はロイがここにいることが信じられなかった。
「あいたかったよ。すぐに戻らなければならないことがあって、挨拶できなくなったんだけど・・。」
「そ、それをいいにきたの・・？」
私にはロイの行動が理解できなかった。
そこまでしてきてくれたことはすごくうれしいんだけど。
「いいや。ちがうよ。君を連れ戻しに来たのさ。」
「え？何で？ど、どうして？」
いきなり信じられないことを口にするロイ。
「それはね・・。その話の前に、ちょっとこれもってくれないかな。」

ロイがそういって、私に持たせたのは何か香りのする袋だった。いい香りがする。甘い香り、それは見るもの全てにひきつけられるそんな感じがする。
「つらいだろうけど・・。これを見てくれないかな。」
ロイは何か写真を渡した。そのとき、えもしない悪寒が体中をめぐった。
暗くて見えなかったから明かりをつけた。
　写真に写っているのは私の髪の毛を持っているゼロだった。
「な、何これ？」
ユウナは信じられなかった。
「ゼロはね、君の能力を利用しようとたくらんでるんだよ。知っているでしょ？能力は、能力の持つ持ち主の細胞を媒介して手に入れられることを。でも今はそれを研究中だということ。細胞は何でもいいんだよ、髪の毛一本でも・・。」
ロイは静かに言う。
「嘘よ・・ゼ、ゼロが・・信じられない。」
私は信じることができず、震える。
この写真を持ったとき感じた悪寒はこのことをいっていたんだ。
「・・でもこれが証拠。だから君を連れ戻しにきたんだよ。」
「で、でも、もし、私がここから姿をくらませたら・・。」
「大丈夫。僕がユウナを守るよ。だからついてきてはくれないかな？」
「ロ、ロイ、で、でも！・・信じられないよ・・ゼロがっ・・・・・・・・んっ、んぅ」
ユウナは必死でロイにゼロがやってはいない、間違いだと何とか言おうとするが、ロイによって口をふさがれいえない。
「・・ん、んぅ・・んっ・・・はぁっ」
ロイのキスは強烈だった。頭ではもう何も考えられない。
ロイは唇を離し、
「ユウナ、僕は君が好きだ。ユウナは僕のこと、好き？」

そう問いかけてきた。
「私は・・ロイが・・好きだよ・・誰よりも・・・。」
わたしは気づいたらそう口にしていた。
確かに好きではいるが、誰よりもなんて・・・。
そのとき、
「んぅっ、ん、んんっ・・・・。」
ロイがまたキスをしてきた。
さっきよりも甘く深くなるキスに私は溺れた。
ロイが好き。ロイしかいない。ろい、ろいっ。
ロイへ向かう気持ちがあふれ出てきた。
ロイは唇を離した。
私は、意識はがもうろうとしてきて、ロイに言おうとした。
が、甘い香りとロイの視線が言わせてくれず、そのまま、意識を失った。

ロイは気を失ったユウナを抱いて、窓から飛び降り背中に翼を広げて飛んだ。
そして、ロイはユウナをつれて神の国に戻った。

ロイの言ったことには偽りがある言葉もあるとだけ述べておくことにする。

第二十一章　ゼロの決意

ゼロが目を覚ましたときにはすでに朝という時刻ではなかった。
ゼロは起きて時計を見た。
もう、十時を過ぎている。
俺はそんなに疲れていたのだろうか？
こことところ、昨日より疲れた日だって何日かあったはずだが。
おかしい。
そう思いながら、ベットから起き上がり部屋から出た。
部屋から出たところには、リアーネルたちがいた。
「ゼロ様、すごく深く眠っておられましたが、昨日はよほどお疲れになりましたか？」
「いいや。そこまで疲れていたわけではない。それより、今日は国務の仕事はないのか？」
「それが・・今日はなぜかないんです。国王が復帰したのかと存じますかと・・・。」
「そうか。」
「なら、ユウナに会いに行くか。ここのところ、会う時間すらなかったからな・・。」
「はぁ。では、私たちは側近部屋におりますゆえ、何かあったらご連絡をください。」
「あぁ。そうする。」
俺はユウナの部屋のドアをたたいた。
何度たたいても返事はない。
俺は部屋のドアを開けた。
「？」
いない。ユウナがいない。
ユウナが部屋から出るはずがないのだが・・。
「？」

何で、窓が開いている？
ユウナガ窓を開けるなんていつもはそんなことしないはずだが・・。
今日は不思議なことだらけだ。
「！」
これは何だ？編み物か？

ゼロが拾い上げたものはまさしくユウナガゼロに送ろうとした編み物だった。

ゆうなが床にこんなものを置くなんて・・。
俺は、ゆうなを探しに城を回った。
城中探したがどこにもいない。
城の者に聞いたが昨夜は見たが今日は見ていないと答える者が多かった。
おかしい。
確かに昨日は見たんだ、いたんだ。
なのにどうしていない。
昨日？
そういえば、昨日はおかしなことばかりだった気がする。
昨日、ユイは外出した。
いや、それは関係がないか・・。
それよりも、昨日は警報機がなった。
誰も妖しいものを見た奴なんていなかったはずなのに。
故障じゃないかとみんなが言ったから俺もそう思ったが。
もし、昨日本当に怪しい奴・・侵入者が来たとすれば一体何を狙う・・・？
「！？」
ユウナ！？
ユウナを狙ったかもしれない。
そうすれば、ユウナが見当たらないのとつじつまが合う。

ロイは気づかなかったが、あの後警報機がなったのだ。
その音は寝ていたゼロさえも起こすほどに大きかった。

ゼロは急いでリアーネルたちを呼び戻した。
そして、リアーネルたちにゼロが立てた仮説を教えた。
「そうかもしれません。・・つじつまも合いますし。急いで、聞き込みを開始いたします。」
そういって、リアーネルたちが聞き込みを始めた。
　しばらくしないうちに二人が戻ってきた。
「ゼロ様！昨夜、警報機がなったころ、夜空に翼の生えたものが神の国のある方向に飛んでいったという情報が入りました。もしかすると・・その侵入者は・・・」
二人は最後、言葉を飲み込んだ。
「ロイかもしれない・・か？」
「はい。ロイ殿自身でなくとも、そのの関係者の可能性が高いかと・・」
「そうか。・・ロイのやつっ！・・訴求に神の国にいく準備をしてくれ。」
「御意。」
二人は駆け足で俺の命を実行しにいった。
ゼロはこぶしを握り締め、怒りをみなぎらせた。
俺が国務のほうばかり気を取られていたから、ユウナがッ！！くそッ！
何か物を床に叩き付けたい気分に陥った。
大事なものが急に消えてなくなることがこんな感情を生むなどと・・。
俺はロイを侮っていた。
ロイはユウナのためなら手段を選ばない。いや、自分のためならどんなものも犠牲にする。

だったら、俺はっ！俺はユウナを自分のものにするためにはなんでもしてやろう。
それが俺の意思。
俺はロイにユウナをとられたくないッ！！
ゼロは自分に強く言い聞かせ、強い曲げない心で決めた。
もう、誰もゼロをとめることができない。

第二十二章　傷ついた心

ユウナが目を覚ました場所はロイの城であり、寝室のような場所だった。
目を覚ましたユウナにロイが
「ユウナ起きたんだね・・。大丈夫？気分悪そうだけど・・。」
心配している声で言う。
「・・うん。少し気分が悪いかも・・。もう少し寝るね・・。」
ユウナはつかれきったような声で言う。
そして、ロイの返事も待たず、ベットの中にもぐりこむ。
・・あの、ゼロが・・私を利用だなんて考えられない・・。
・・嘘だよね。誰か・・嘘だといって・・お願い・・。
・・もう、誰も信じることなんてできない・・。
ユウナの心はずたずたのぼろぼろだった。
「ユウナ・・。もう、大丈夫だから・・。僕が守ってあげるから・・
不安がらないで・・。」
ユウナの心を察したように言うロイ。
「・・うん。」
ユウナは言った。
・・一人いた。私を絶対に裏切らない人・・ロイが・・。
ロイだけは信じられる・・。信じることができる。
でも・・。
ユウナの心はロイの支えだけでは足りなかった。
傷つけられた部分があまりにも大きかった。

　ロイは計算外だった。
ユウナの心に、ゼロの存在がユウナをこんな風にしてしまうほどの大きな存在になっていたことは、あまりにも予想はずれであった。
ロイは、少し落ち込む程度のものでしかないと思った。

ロイは心でどうも引っかかるものを振り払い、
・・もう、これでゼロからユウナを取り返すことができた。もう、大丈夫なんだ。
そんなに恐れることはない。もう、終わったのだから。
と、自分に言い聞かせた。

ユウナは食欲がなく、日に日に笑顔がなくなっていった。
ユウナの状態は悪くなるばかり。
ロイはそのことに驚愕した。
ロイは、ユウナを元気付けようといろいろな策を講じた。
だが、それもむなしく失敗。
ロイは戸惑った。
できうることはやった。
だが、効果はなかった。
まだ、打つ手はある。
だが、それは・・ユウナ自身を壊すものにもなりかねない。
一か八かの賭け。
だが、成功すれば、ユウナは元気を取り戻すだろう。
でも、その代償は大きい。
その策を講じるか否か。
ロイが戸惑ったのはそこだった。
ユウナを自分のものにしたい。
だが、それ相応の代償を払う必要がある。
代償なくしては手に入れることは不可能だ。
代償の大きさゆえにロイは深く迷った。
迷った結果、その策を講じることに決意した。
人形のように、うつろな姿の今のユウナはユウナではないのと同じ。
そんなユウナといても意味がない。
だから、元に戻すのだ。

ユウナのため・・いや、自分のために、この策を今講じるのだ。

ロイは自分自身のために策を実行しようと決意した。

そのころちょうどゼロは神の国への侵入を成功させた。

第二十三章　誤解

ユウナは、ぼんやりとベットから窓越しで空を見上げていた。
・・ロイが私を元気付けようとしてくれてるのは分かるけど・・
・・なんでだろう？・・無理をしてでもロイに微笑むことができない。

ユウナがロイの城につれてこられて一週間が過ぎた。
その間、ろくに食事を取っていないので、ユウナはベットでいつも横になっている。
ユウナはどうしても食欲がなくて食べたいと思えないのだった。
・・おなかがすかない・・いつもなら・・すぐにすくのに・・。
・・ロイは困っているのかな？・・困っているよね。・・私がいつまでたっても元気出さないから・・
そう思って窓から城と夜空を見ていた。
すると、城中明かりが一気に灯りだした。
城がすごく騒がしい。
一体何があったのかな？
不思議に思ったそのとき！！
ドン！！
私のいる部屋の扉が誰かによってけり倒された。
扉をける倒した犯人は・・・ゼロだった！！
「・・どうして・・！！？」
私の声はかすれた。
私を利用しようとたくらむゼロが何で！？
「ユウナ！！」
ゼロは私に駆け寄り、私に触れようとした。
触れようとしたゼロの手を私は振り払った。
「！？」

ゼロは驚いた顔をして私を見る。
「触らないで！・・どうしてこんなとこに来たのよ！！なんでわたしなんか・・・むぎゅ！」
私の言葉を無視し、ゼロは私を急に抱きしめてきた。
「お前を取り戻しにきたんだ！！ほかに何がある！！」
ゼロは叫んだ。ユウナは必死でゼロから離れようと抗う。
ユウナは何を言っているんだ！？
「やめてよ。放してよ。・・どうせ私を何かに利用しようとしてるんでしょう？
そのために取り戻しに来たんでしょ！！そんなもののために私なんかを・・！！」
「利用？何を言っているんだ？俺はただ・・」
「とぼけないで！！ロイに聞いたんだからぁ！！ゼロは私を裏切ったことを！！」
「ユウナ！！お前、何をロイに聞かされた！？あんな奴を信じるな！！
俺はお前を利用なんかに使ったりしない！！」
ゼロはユウナを強く抱きしめ、そして叫んだ。
「嘘よ。絶対に・・嘘・・。」
ユウナの抗う力は徐々にだが抜けていく。
ゼロはそれをチャンスにユウナの唇を一気に塞いだ。
「んっ！？んぅ・・んんっ」
ユウナの唇からかすかにもれる。
ゼロは一回、唇を放し、
「前に言っただろう？俺はユウナが好きだと。俺はお前を手放したりしない、絶対に！！」
そう叫んでまた唇を塞ぐ。
ユウナの抗う力はもはや完全になくなった。
ユウナは俺を誤解してたんだ、ロイの手によって。
だが、ユウナはそれを信じられずにいた。

それがユウナが俺に対する想い。
あれから一週間過ぎてもユウナは俺をどこかで信じていたのだ。
その結果が今。
「俺はお前をはじめから裏切ったりなんかしてないんだ。ユウナは誤解してたんだ。」
「誤解？・・・もしそれが・・本当だとしたら・・ロイは？・・・ロイが私を・・・。」
ユウナの言葉は途切れ途切れだった。
もう、動けまい。
俺はユウナにもう一度キスした。
「ん、んぅ・・・・・」
ユウナの体は完全に力を抜けて、脱力状態となった。
俺は唇を離し、ユウナを抱き上げた。
そのときだった、部屋の目の前にロイが訪れたのは。

第二十四章　ユウナの取り合い

「ユウナをおいて帰れ、ゼロ！」
ロイはゼロに向かって怒鳴った。
「おいてかえる、だ！？何のために来たんだと思ってるんだよ、ロイ！」

「僕にはユウナが必要なんだ！！」

ゼロはロイに言い返した。
ロイはユウナが必要だと叫ぶ。

ユウナはロイが視界に入ってすぐに気を失った。

「必要？？必要だからってこんな扱いしていいと思ってんのか？？
お前ならもっと丁寧に扱うと思っていたが。
まるでユウナは人形みたいなありさまじゃないか！？
お前一体何をユウナに言い聞かしたんだ？」

ゼロが叫ぶ。

「お前じゃユウナを守り通すことなんかできない。
お前は魔の国の王子なんだからな。
そのことをユウナには理解してもらっただけだよ。
いつ利用されるかわからないって。
そういっただけさ。だってそうだろ？
魔の国は大きな力を欲している。そのための婚約だという情報が入ってきた。
ユウナがこのまま利用されるよりここで暮らしてもらうほうが幸せ

だよ。」

ロイが説明する。

「利用？そんなことのために魔の国の王は婚約を光の国に取り付けたわけじゃない。
戦争をやめたかっただけなんだ。」

ゼロが言う。

「表ではそうなっているけど、どうやら本当のことは王子ですら知らないようだね。」

「どういうことだ？」

「知っているかい？今まで魔の国が神の国であるここを攻め入ってこなかった理由を。」

「は？それとこれが関係あるのかよ？」

「関係おおありさ。魔の国は神の国を攻めて勝つ力はないに等しいのだから。
そのために光の国を攻めて自分のものにしようとしたんだ。
でもそんなことしなくても大きな力を手に入れられることを見つけてしまった。」

「それがユウナだといいたいのか？」

「そうだよ。魔の国は、三つの国全てを自分のものにしたいと考えているんだ。

でも神の国には到底勝てない。光の国と争えば犠牲者が出る。
そこで平和条約という名の婚約を見出したんだ。
婚約相手は光の国の王女であるユウナ。
ユウナの力は魔の国にとってこれ以上にない大きな希望。
この力を利用するほか神の国を侵略なんて不可能なんだ。」

「嘘だろ。そのための婚約だなんて。」

「嘘と言い切れる？言い切れられるはずなんてないだろ？光の国との戦争中、そっちの王は生き生きとしてたもんね。」

「ぐっ」

「何もいえないだろ。そりぁそうだ。ゼロはその王を直接見てるもんな。だったら分かるだろ？
ユウナを連れて行けばユウナを不幸にあわせるのを手伝っているようなものだと。
だからユウナをおいていけよ。
僕なら絶対ユウナを守ることができる。
魔の国は神の国をユウナなしじゃ侵略は不可能なんだからな。」

「俺は魔の国の王子だ。俺が王になればユウナを戦争のための道具になどしない！」

「王になる？？君が、かい？無理だろ？次男だろ？ゼロは。」

「俺は確かに次男だ。王になるまでの間かなり時間がかかる。だが、王は俺の行動しだいで決めてくれる。　王は兄上より俺を選んでくれたからな。」

「ゼロの行動しだい？その中にユウナの利用が含まれていたらゼロはどうするんだ？」

「含まれはしないだろう。今、王は病で伏せている。先ほど復帰したがまた病に伏せるだろう。
王の体は毒には弱い。」

「毒だと？」

「そうだ。王というのは他人に疎まれやすい。そいつらが仕込んでいるそうだ。
他の者はそれに手助けしているようだからな。
少しでも俺が王の助けとなれば王は俺を選ぶ。
兄上は王位を拒絶しているからな。」

「魔の国の王は戦争好きといっているが本当なんだな。
それなら誰が王を恨んでもおかしくない。
分かった。とりあえず、ユウナをお前に託すとしよう。
もし、ユウナを危ない目にあわせでもしたら僕は国を動かすことになってもユウナを連れ帰るからな。」

ロイはゼロに悔しそうに言った。

「あぁ。だが、ユウナをまた連れて行こうなんて簡単できるなんて思うなよ。」

「はは。分かってるよ。そんなこと。
そうと決まればお前は早くユウナをつれて出て行くがいい。
城の者には僕が言っとくから。」

「あぁ。よろしく頼む。」

ゼロはユウナをつれて神の城から出て行った。
ロイはそれを見ながら
『ユウナ、次に会ったときに何を言うだろうか？』
と、思いながら苦笑した。

第二十五章　信じろ。

ユウナの目が覚めた場所は見慣れていたゼロの城の自分の部屋だった。

「何で私が・・こんなところに・・」

思わず呟くほど驚いた。

「目が覚めたか?何でって、お前を取り戻したからに決まっているだろ。」

ゼロが言う。

「ゼロのこと・・信じていいの?」

私は聞いた。

どうにも信じることができない。

「疑うなよ。お前はロイにそそのかされていただけなんだよ。」

「信じることができない。ロイが私を・・・んっ!んんっ」

私がそれでも信じようとしないからゼロが強引に唇をふさいできた。

「ん、んっ・・・んん・・んぅ・・・」

強引すぎてもがいてもゼロはやめてくれない。

こんなことをされると信じるしかなくなっちゃう。

「んぅ・・・・はぁ・・・何するのよぉ？」

やっと唇を離したゼロに私は聞いた。

「お前が信じないのが悪いんだ。いい加減に信じろ。」

ゼロが言う。

「信じれないものは信じれない。」

私は言う。

「お前、そんなにされたいのか？」

「・・・・。だいたい・・キス・・なんかで信じさせようとすることから理解できない。」

「じゃぁ、一体何をすれば信じさせることができるんだ？」

「知らない。もともと私の心は凍っているから揺れ動かすことなんてはじめからできないのよ。」

私は冷たく言い放つ。

「じゃぁ、何でロイは信じる？」

「・・・・。」

今まで言い返したが今度は押し黙った。

「なんか言えよ、ユウナ。」

「じゃぁ、何で私をそんなに信じさせようとするの？」

「ユウナが好きだからだ。それ以外何の理由がある。」

「好きだからって言われても・・それは理由になっていない気がする。」

「好きな奴に信じてもらえないのはさすがにつらいぞ。」

「そんなことといわれても・・・。」

好きを連発されるのはさすがにきつい。

そこにゼロは気がついたのか、

「俺はユウナが好きなんだ。聞こえてるか？
お・れ・は・ユ・ウ・ナ・が・好・き・なんだ。
誰が裏切ったりするかよ。好きな奴を裏切るような奴は失格だろ？」

と、好きを連呼する。

何でそんなに好きを連発できるのよ。恥ずかしいじゃない。

「ん？何でそんなに顔が赤いんだ？」

ゼロがからかうように言う。

「熱があるのか？だったら俺が今見てやるよ。」

絶対、こいつ、私の反応をみて、からかってる。

こうなったら我慢。

ゼロが私の額に手を伸ばす。

私は思いっきり目をつぶる。

だが、チラッと見てしまった、ゼロのたくましい手を。

私はそれを見て取り乱した。

「わッ、わッ、や、やめてッ、ね、ねつなんてないから・・ちょ、ちょっとぉ」

声が裏返った気がする。

私の声にゼロは余計やめなかった。

ちかい、ちかすぎるぅ～

「おい、そんなに邪険に追い払わなくても。じっとしてろって。お、おいっ、こ、転ぶって」

「や、やめてっ。きゃっー。」

どって～ん

私とゼロはベットから落ちた。

ゼロが私をかばうように落ちたから私は何もなかった。

落ちたって高さでもなかったけど。

ゼロは私を抱きしめる形でずり落ちた。

「いたたたぁ。ユウナ、大丈夫か？」

「う、うん。」

背中にゼロの手がぁ～。

「ん？おい、大丈夫か？」

ゼロは私のあごをくいっと持ち上げ私に顔を近づけてくる。

「大丈夫。」

「そうか。」

ゼロはそういって私にもっと顔を近づける。

私が反論をする前に唇をふさいできた。

「んっ！・・・んぅ・・んんっ！？」

私の唇をこじ開け私の口に下までもが入り込んでくる。

甘いキス。

私を覆いかぶすようなやさしいキス。

「・・・ユウナ。」

ゼロが唇を離し呟く。

「・・・・何？」

「信じてなくてもいい。だが、それを言葉に出さないでくれ。
俺は信じるって言って欲しいんだからな。」

「そんなことといわれても。」

「わかった。明日、外に連れ出してやる。覚悟してろよ。」

ゼロはそういい残し、私の部屋から出て行った。

もう信じてるけど、私、いえないな、きっと。

言いたくても、プライドが止めるのだから、

いいたくてもいえない

ユウナだった。

第二十五章　信じろ。（後書き）

書き方変えて見ました。
読みにくいと思いましたらお知らせください。

第二十六章　ユウナのドレス

翌朝、ゼロは私の部屋に来た。

「お前、踊れるか？」

私の部屋に来て最初にいう言葉かこれはっ！

「は？」

私は聞き返した。

「だから踊れるかって聞いてんだよ。」

「一応踊れますけど・・・でも何で？」

「今夜、舞踏会がお前の光の国で行われるそうだ。俺は国務で忙しい。
だが、今夜は時間が空いている。ちょうどいいと思ってな。」

「・・・ゼロはわざわざ今夜の時間を空けたんですか？」

「うっ。それは・・・」

私の言葉にゼロは顔色を変えた。

「あなたならやりそうね。国務で忙しいならそちらにいそしめばいいのに。」

「確かにお前との時間を作るためだが、利益はそれだけじゃない。光の国との交流を深めるためにでもある。まぁ、そうはいっても仮面舞踏会だからな。正体を明かすことはできないが舞踏会の主催者には言うつもりだ。」

「主催者に明かしてしまうと、他の方々にばれてしまうのでは？」

「それは心配いらない。主催者はばらそうとはしないさ。それに他の有名な貴族もこられるそうだからな。」

「有名なのね、その舞踏会は。」

「いいだろう？たまにはそういうことも。」

「まぁ、ゼロがそういうのならいいわ。光の国にも戻れてうれしいし。」

「そうか。じゃぁ、俺はこの辺で。あ、そうそう。俺がいろいろ手配してやったからそれが後から届くだろ。6時に迎えに来るからそれまでには支度を終わらせろよ。じゃぁな。」

ゼロはそういって私の部屋から出た。

早口で言わなければならないことだけ言っといて即座に出て行ったところからすると

どうやら本当に忙しいらしい。

ゼロはそれだけ私に求めてるってことかしら。

こんなにも私はあなたに冷たくしてるのに。

ゼロがどうして私なんかにそこまでする理由が分からない。

私は心の中で呟いた。

昼になってゼロの言ったものが届いた。

そして私は届けられたものを侍従たちの手によって着飾られる。

届けられたもの・・・

それは純白のドレスとダイヤモンドのついたネックレスとそのほかたくさんな飾り物。

その届けられたものには全て共通点があった。

それは全て白にゆかりのあるものだった。

見るもの全てが白。

いやになるくらい周りが全て白で頭がおかしくなりそう。

おまけに仮面まで白。

こんなにも私の髪の色に合わせなくたっていいのに。

私の髪の色は白。白髪なの。
白髪って言うより銀髪に近いのだけど。
着飾られた私を見て侍従たちは
「なんとお美しいのでしょう。」
「ゼロ様がお選びになったのでしょうね。」
「ゼロ様はほんとに見る目がいいですわ。」
「ユウナ様は幸せですね。あんないい殿方の妻になられたのですから。」
と、私やゼロを褒め称えた。
ゼロはみんなに慕われているんだな。
「私・・似合ってるかしら・・」
思わず呟いた。
「それはもう。すごくお似合いですわ。神々しくて惚れ惚れしてしまいます。」
「自身をお持ちくださいませ。ユウナ様のお姿に誰もが魅了されますわ。
それは私たちが保証いたします。」

「そう？そこまで言われると恥ずかしいわね。」
侍従たちの言葉に私は頬をほんのり赤く染めた。
誰もが魅了されるって言われても・・困るわ、そんなの。
銃たちは私をほめた後、帰っていった。
一人残った私はドレスにしわができないようういすに腰掛ける。
なんか・・だるい。
銃たちがあーだとかコーダとかいろいろと動かされ着飾られたからだろうか。
それにしても重い。
何この飾り物の多さはっ。
髪を結う宝石で派手に飾る髪留め、私が動くたびにゆれるイヤリング、
ドレスを派手に飾る数々の宝石、ドレスに合わせた色の白いヒール、
そのほかもろもろ。
見た人が魅了されるどころか逆に引くんじゃないかしら・・この装飾の多さに・・。
そう思っても仕方がないほど多かったのだ。
あぁ～。頭がおかしくなりそう。こんなものばかり見てると・・。

いや、もうおかしいかもしれない。
なんだか、だるいし、重いし、考えられないし。
こんな重いもので私は踊らなければならないんだろうか・・
私がはぁとため息をついた。
それと同時に部屋のドアが開けられた。
「おい、もう準備できたか。」
ゼロはそういって私に声をかけて部屋に入ってきた。
ゼロは私を見るなり硬直した。
「どうしたんですか・・？」
何で硬直するの？
やっぱり似合わなかったかしら。
「普段とのギャップがすごいな、と思ってさ。」
「やっぱり似合わないですよね・・」
私がゼロの言葉にそう呟くとゼロはあわてた。
「ち、違う。そ、その逆だ。お、俺が言いたいのは。
ユウナは普段こんなものを着ないから、いざ、それを着たユウナの
姿を見ると、

あ、あまりにも似合ってて・・だからその驚かされたというか、なんと言うか・・・」

ゼロはあわてて言い直した。

「・・・。」

ゼロのあわてぶりに私が硬直する。

ゼロが言いたかったのはそっちのほう？

そんな似合うとかいわれるの困るんだけど・・

「じゃ、じゃぁ、いくか。そろそろ行かないと間に合わないからな。い、いくぞ。」

ゼロはそういって私の手を引っ張って部屋を出て馬車に乗り込む。

私はゼロに手を引っ張られついていく。

ぼんやりした頭では何も考えられなかった。

ただ、一つ考えられたのは

何でゼロの手がこんなにも熱いのだろうか？

ということだけだった。

第二十七章　舞踏会

私とゼロは馬車に乗った。

私は窓から風景をぼんやりと見ている。

馬車に乗っている間もゼロは私の手を放そうとはしなかった。

まぁ、別に振りほどくほどいやではないから抵抗はしなかった。

抵抗する力がなかったといってもいいけど。

風景が魔の国から光の国へ変わる頃、ゼロが馬車の中で初めて私に話しかけてきた。

「ユウナ、気分が悪いなら言えよ？」

「え、えぇ。」

ゼロが何でそんなことを聞いてくるのか私には分からなかった。

光の国の景色は私が出て行く前より明るく華やかになった。

夜景だけでは一つ一つの細かいところまでは分からないが。

・・懐かしい・・

と、思いながら私が風景を見ていると、馬車が止まった。

ゼロと私は馬車から降りた。

手はそのときに、はなれたが。

私とゼロは舞踏会の主催者に会い、参加者の覧に記名した。

私たちはすぐに舞踏会の開かれている大きなホールに入ることができた。

ホールはとても大きく隅まで見渡すことができないくらいだった。

まぁ、もっとも、人が多すぎて見えなかったと言ってもよさそうな大きさとでもいえるほどだったが。

ダンスができる広場を囲むように離れたところに食事が乗っているテーブルが並んでいる。

ゼロがホールに入って早々にダンスの申し込みを私にしてきた。

「俺と一曲踊ってくれませんか？」

当然仮面をしているからどんな表情で言っているのかは分からない。

「えぇ。喜んでお受けしましょう。」

私はゼロの差し出した手のひらに自分の手を置く。

そして私とゼロは踊った。

曲に合わせてゼロが私をリードする。

「一応って自信がなさそうに言ってたわりにはできてると思うぞ。」

ゼロが言う。

「・・ゼロのリードがいいからよ・・・」

私は言う。

私よりゼロのほうがすごくうまかった。

よっぽどダンスを叩き込まれたのだろうか・・

そのうち、一曲が終わって私とゼロはダンスをやめた。

「とりあえず何か食べるか。」

ゼロはそういって私と一緒に近くのテーブルに向かう。

ゼロと私に参加者たちの視線が集まる。

私はともかくゼロは他のかたがたの目にとまってもおかしくないほどかっこよかった。

だからといってもいい、ゼロの周りは舞踏会の参加者ばかりで埋もれてしまったのだから。

それで、その参加者たちに押しのけられてもといた場所からかけ離れたところに今はいる。

つまり、はぐれてしまったのだ、ゼロと。

私はゼロのところへ戻ろうとしたが

なぜか私にも貴族だと思われる男性たちの波に押し寄せられ

行きたい場所とは真逆の方へと追い詰められてしまった。

「かわいらしいお嬢さん、俺と踊ってはくれないか？」

「いやいや、僕が先だ。可憐なお嬢さん、僕と一曲お相手願いたい。」

「俺のほうが先だっ。清楚なお嬢さん、俺と一曲踊ってはくれま・・・・」

などと、さまざまな男性たちが言い寄ってくる。

「ありがとうございます。ですが人を探しておりますゆえ、踊れませんわ。」

私の言葉に男性たちは

「なんてお冷たい言葉を～～～」

「僕を断って君は誰と踊ろう何て思ってるんだぁ～～～」

「お、俺をおいてかないでくれぇ～～～」

嘆き、わめいて言っている。

酔っているんだわ、きっと。

私はそう思ってその場を抜け出した。

隅でやり過ごそう。

そう思って隅のほうにいくと、一人の男性が声を掛けてきた。

「お嬢さん、あなたはなぜ踊りに行かないのですか？こんな隅に来られて・・」

その男性は言った。

「人を探しているのですが、なかなか見当たらず
いろいろな方が踊りを誘ってはくれるのですが断るのが大変で・・」

私は目を伏せがちに言った。

男性は近くのテーブルにあったグラスを私に差し出した。

「あなたはとても美しい方だ。きっと飲む暇もなかったでしょう？」

男性は言った。

私はグラスを受け取って、

「美しいだなんてお世辞はやめてください。
でも、ありがとうございます。のどが渇いておりましたの。」

そういってグラスの中の飲み物を飲み干した。

のどが潤う。

それと同時に体がほてったのを感じた。

これ・・お酒だったのね・・

「お嬢さん、一曲お相手してくださいませんか？」

男性は言った。

「え・・でも私は・・人を探してると・・・！」

私の言葉の最中に男性は私の手を引き、自分のほうに引き寄せた。

「今宵はどんな無礼も許されます。それにここは舞踏会。踊らずとして何の場所でしょうか・・？」

「・・そこまで・・・いうの・・・・な・・・ら・・・・っ」

私が誘いを受けようとしたとき、めまいが私を襲った。

男性のほうに私の体は倒れるはずだった。

私の体が男性に触れる前に後ろから誰かに支えられたのであった。

だ・・・れ・・？

ぐらぐらする頭の中に会話が聞こえた。

「こいつが迷惑をかけた。俺が運ぶから気にせず舞踏会を楽しんでくれ。」

「君、誰だい？あ、聞くのはタブーだね。

せっかくこの子を踊りに誘おうと思ったけど、この子には酒が強す

ぎたみたいだね。」

「あぁ。じゃぁ、俺は連れて行くから・・・・迷惑かけたな。」

私を支えた人が私をすっと抱き上げる。

狭い視界の中に見えたのは黒髪の持ち主。

ゼロが・・・・来て・・・・・くれ・・・・た？

目が回る。

くらくらする。

熱い。

これが酔ったということなのか、それとも日ごろの疲れのせい？

ゼロは私を部屋に運んだ。

そしてベットではなくソファに自分にもたれかかせるような状態で私をおく。

ゼロは私の仮面を取り上げて

「無理してたのか？」

と、聞いてくる。

「むり・・なんか・・してない・・・ただ・・疲れてた・・だけ。お酒が・・あんなに強いとは・・・思っても・・・みなかった・・だけ。」

私は言う。

そしてすっと目を閉じる。

「分かった。この話はまたにする。だからもう寝ろよ？」

ゼロはそういって私の頬に手を置き、私の唇に自分の唇を重ね合わせた。

いつもよりやさしくてほんのり甘いキス。

それを最後に私は深い眠りについた。

第二十八章

ユウナはふと目がさめた。

目が覚めた場所は自分の部屋。

私はゆっくり起き上がる。

「ユウナ、まだ具合が悪いなら寝てろよ。」

話しかけてきたのはゼロ。

頭・・痛い。

なんかくらくらする。

私は頭を抱えた。

その動作を見たのか、ゼロが近づいてくる。

「昨日、悪かったな。楽しませてやれなくて。」

「き・・の・・う・・？」

私は首をかしげた。

何があったかいまいち覚えていない。

記憶が昨日の部分だけあやふやで何も思い出すことができない。

「覚えていないのかぁ？」
ゼロが不思議そうに言う。
「舞踏会に行ったろ？」
「そういえばいった気がする。ゼロと踊ったのは覚えてるけど・・」
「そうか、覚えてるならいい。それよりユウナ、お前、酒に弱いのか？」
お酒・・私は弱いのかな？
あんまり飲んだことないし、飲んだ日は記憶がとんでることが多いけど。
「分からない。あんまり飲んだことがないのは確かだけど。」
「そうか。言い忘れてたが、そろそろユウナの誕生日だろ？」
「え、えぇ。そうだけど。それが何か？」
「俺が祝ってやる。」
「え？」
ゼロが堂々と言い放つからびっくりした。
「俺が祝ってやるから、それまで体調管理しっかりしろよ。

まぁ、念のため、医者と侍従はつけたけどな。」

ゼロ、やけにうれしそうだな。
たかが誕生日なんかで。

「誕生日か・・」

私は呟いた。

ゼロが祝ってくれるのはうれしいけどいつもロイが祝ってくれたからなぁ。
ことしはそうもいかないかー。

「？・・じゃぁ、俺は行く。ユウナ、自分を大切にしろよ。」

ゼロは私の額に口付けをして出て行った。

自分を大切に、かぁ。

ロイにも言われた気がするなぁ、そんなことを。

同じことを言うんだね、二人は。

ふふふ。

私は思わず笑みが漏れた。

ゼロが出て行ってからしばらくすると医者が訪れた。

「倒れたのはきっと疲れがたまったからでしょう。酒が引き金にな

ってしまったようです。
しばらくは安静にベットで寝ていればすぐに良くなりますよ。」
医者はそういって出て行った。
その後侍従たちが来て、部屋の掃除やなんだかんだいろいろしてくれた後帰っていった。
ゼロは私を大事にしてくれる
私はそのことを実感できた。
私は・・私はゼロを大事にしてる？
そう自分に問う。
してないかもしれない。
だったらゼロに何かあげよう。
せめてものお礼に。
自問自答した私はしばらく安静にしていた。
医者がもう大丈夫といってくれた日から私はゼロに何をあげようか悩んで作った。
そして私の誕生日がとうとうやってきたのだった。

最終章

私の誕生日パーティーは盛大に祝られている。

いつ、渡そう・・

そう思いながらパーティーを楽しむ私であった。

ゼロに私、ゼロの従者、他の大臣たちも。

みんながみんな、微笑んで楽しそうだった。

私が主役だからみんなが私に気を使ってくれる。

ゼロは私のために大きなケーキを料理長に作らせてくれた。

頼んだ覚えはないけど。

私は機を見てゼロにプレゼントを渡そうと思っていた。

私がゼロにあげるもの、それはクリスタルだった。

私が魔法で丁寧に思いを込めて作ったきれいなクリスタル。

光の国で作っていたときはみんなにほしがられていた。

みんなして

「レインボークリスタル、ちょうだいっ」

と、言って私にせがんできたのであった。
光のあたりぐあいで七色に輝くクリスタルはとても魅力的なものだからだった。
ほしいといわれて作ってはいたけど、誰かにあげようと思って作ったことはなかった。
ロイには違うものをプレゼントしてたし・・・。
ゼロにあげるクリスタルはネックレスとして使えるように銀のチェーンを通してあった。
使ってくれるだろうか？
不安に思うときもあった。
でも使われるためにあげるんじゃない。
私の気持ちだもの。
使われなくたって・・・
お礼にとあげるものだがやっぱり使ってほしいと思った。
思い悩んでいる頃、ゼロが
「ユウナ、ろうそくの火を消せ。」
と、私に向かって言った。

「分かった。」

私は返事をして大きなケーキに刺してあるろうそくの火を消した。

ふーーーー

がんばって消した。

だから一度で全てのろうそくに火が消えた。

ろうそくに火が消えたと同時に拍手が起こる。

ゼロが私に近づいてきて

「ユウナ、誕生日おめでとう。」

と、言って何か渡してきた。

「ありがとう。・・私からも・・・今までのお礼。」

私もゼロに渡した。

「お前からもらったら本末転倒じゃないか。返すわけにもいかないからもらうが。」

ゼロはやや不満そうに言いながらうれしそうに受け取ってくれた。

それから、パーティーはおおいに盛り上がった。

パーティーがお開きになった後、私はベランダに行った。

暁の空がとても鮮やかだった。

私はこの日を絶対に忘れないだろう。

今まで作ってきたさまざまな思い出も絶対に忘れない。

そしてこれからもゼロとともに心に思い出を刻んでいくんだ。

悲しくても辛くてもゼロがそばにいる。

ゼロがいればなんだって乗り越えられる。

これから過ごす毎日はきっと、どんなものでも幸せなはずだから。

最終章（後書き）

やっと、完結いたしました。
とても長い道のりでしたが、なんとか完結してほっとしています。
ここまで読んでくださって本当に感謝しています。
読んだ感想などをいただけるとうれしいです。
まだまだ未熟な私ですので皆さんからの感想などを生かしていきたいと思います。
本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1204m/

禁断の恋　トライアングル

2010年11月3日01時32分発行